

板付周辺遺跡調査報告書

(13)

下水道工事に伴う調査(1986年度)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第171集

1987

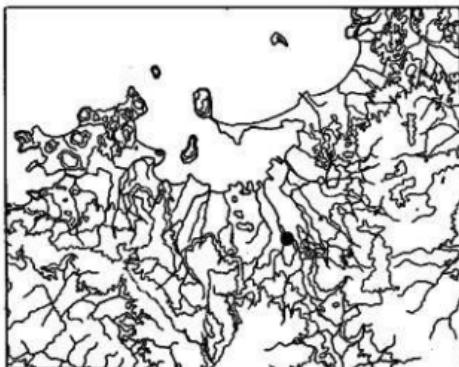
福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書

(13)

下水道工事に伴う調査(1986年度)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第171集



遺跡登録番号 8628
遺跡略号 ITZ

1987

福岡市教育委員会

序 文

北部九州の弥生時代の人々の暮らしを知る上で、板付遺跡は重要な位置を占めています。福岡市教育委員会では、昭和48年よりこれまで遺跡の全貌を探るべく、継続的に発掘調査を進めています。

今回板付地区下水道建設に伴う昭和61年度の調査においても、多大の成果を上げることができました。

つきましては、この報告書が、市民の皆様の埋蔵文化財へのご理解と興味を促すものとなれば幸甚に存じます。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　言

1. 本書は板付地区下水道建設に伴い、福岡市教育委員会
が昭和61年度に実施した板付遺跡F5g・5h・G4a・H5b・
5c地区の発掘調査報告書である。
2. 調査組織
昭和61年度調査(期間1986年7月28日～10月2日)
調査主体：福岡市教育委員会
調査総括：埋蔵文化財課課長　柳田純孝
埋蔵文化財課第1係長　折尾学
調査庶務：埋蔵文化財課第1係　松延好文
調査担当：瀧本正志・横山邦繼
3. 本書の編集・執筆は横山が行なった。尚現場調査では
村上新制・笠　晃・松尾和浩・閑浩司・大部茂久・権藤
利雄・山崎光一・三浦力・吉上久次・山崎脩、また遺物
整理にあたっては児島綱子・小松原澄江・吉田扶希子・
小谷保子・小森佐和子・土斐崎つや子の各氏に協力を得
ました。
4. 本書に使用した方位は全て磁北である。

本文目次

I	はじめに	1
II	H5b地区の調査	3
III	H5c地区の調査	5
IV	G4a地区の調査	14
V	G5g地区の調査	23
VI	G5h地区の調査	27
VII	おわりに	31

挿図目次

Fig. 1	板付地区下水道調査地区図	2
Fig. 2	H5b地区遺構出土状況図(1:100)	3
Fig. 3	H5b地区出土遺物実測図(1:3)	4
Fig. 4	H5c地区土層図(1:40)	5
Fig. 5	SK01・02腰棺墓出土状況図(1:20)	6
Fig. 6	H5c地区遺構出土状況図(1:100)	(折込み)
Fig. 7	SK01・02腰棺実測図(1:8)	7
Fig. 8	SD03溝出土遺物実測図(1:3・2:3)	9
Fig. 9	H5c地区出土遺物実測図((1)、1:3)	11
Fig. 10	H5c地区出土遺物実測図((2)、1:3)	12
Fig. 11	G4a地区SE01井戸出土遺物実測図(1:3)	15
Fig. 12	G4a地区出土遺物実測図((1)、1:3)	16
Fig. 13	G4a地区出土遺物実測図((2)、1:3)	18
Fig. 14	G4a地区出土遺物実測図((3)、1:3)	20
Fig. 15	G4a地区出土遺物実測図((4)、1:3)	22
Fig. 16	F5g地区出土遺物実測図((1)、1:3)	24

Fig.17	F5g地区出土遺物実測図((2)、1:3)	26
Fig.18	F5g・5h地区遺構出土状況図(1:100)	(折込み)
Fig.19	F5h地区出土遺物実測図((1)、1:3)	28
Fig.20	F5h地区出土遺物実測図((2)、1:3)	29
Fig.21	F5h地区出土遺物実測図((3)、実大)	30
Fig.22	板付田端遺跡発見の大石(推定)(1:20)	32

図版目次

PL. 1	1. H5b地区SD01溝出土状況 2. H5c地区SD01溝出土状況
PL. 2	H5c地区第3区調査状況(南から)
PL. 3	1. H5c地区SK01妻棺墓出土状況(東から) 2. H5c地区SK02妻棺墓出土状況(東から)
PL. 4	H5c地区第4区調査状況(南から)
PL. 5	1. H5c地区SD03溝出土状況(北から) 2. H5c地区第4区北壁上層(北から)
PL. 6	F5h地区調査状況(東から)
PL. 7	1. H5c地区SK01妻棺下棺 2. H5c地区SK02妻棺上棺 3. H5c地区SK02妻棺下棺
PL. 8	各地区出土遺物

付図目次

- 付図 1. 板付遺跡調査地点図(1:1000)

I はじめに

福岡平野の東辺を北流する御笠川左岸一帯にはAsoIV火碎流によって成る中位段丘が列をなしで分布するが、これらの丘陵部には数多くの遠古の遺跡群が残されている。板付遺跡の立地する板付台地もまたこれらの一である、南北670m、東西170m程度の南北に長い形状をなし、最高点で標高11.8mを測ることができる。台地は旧河川・丘陵鞍部などによって大きく北台地・中央台地・南台地に区別することができるが、各台地間の空間的有機性はいうまでもない。

1971年春に開始された板付市営住宅建設に伴う緊急調査は進行につれ、それまで知られた台地部分の見方に冲積地の生産遺跡の存在を強く印象づけた。この成果は1976年の板付遺跡の史跡指定に幾分の反映をもたらしたといえるが、また範囲を限定した中での板付遺跡全体像の理解には丘陵全城・周辺地域を対象とする総合的調査の必要性が強く認識されたのである。こうして始められた遺跡の周辺調査は現在多くの成果をおさめ、このことはまた史跡範囲の見直しとも結びつかざるを得ないであろう。

昭和61年度の調査

本年度の調査は、中央台地の西縁・北縁・東縁部にまたがる5地区(H5b・5c・G4a・F5g・5h地区)について行なった。調査は何れも幅員1mのトレンチ状の調査区であるが、H5c・F5g・5h地区では台地縁に近く弥生中期以降の溝・柱穴群・甕棺墓などの遺構群を検出した。またH5b・H5c北端部、G4a北半部は溝遺構などを主とする水田関連遺構があり、台地縁と冲積部の接点を知る上で有効な成果をもたらした。またG4a地区北端部近くでは埋土が粗砂とロームブロックでなる東西に流れる旧河川が観察され、板付北台地での見方とあわせると中央台地北端と北台地間は幅約20mの流れによって分たれているものと考えられた。

(註)「板付」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集』1976 福岡市教育委員会

調査区	所在地	対象面積 (調査面積)	調査期間	検出遺構
板付H5b地区	博多区板付2丁目地内	10m ² (4 m ²)	'86.7.28~7.29	溝(弥生前期)
H5c地区	"	77m ² (76.2 m ²)	'86.7.29~31 "·8.4~12	溝、柱穴群・甕棺墓 (弥生前期~中期初頭)
G4a地区	"	199m ² (199 m ²)	'86.8.28, 9.2~9.7 "·10.1~10.2	井戸址・水田・柱穴群 (弥生前~中期・古墳前期)
F5g地区	"	25m ² (20.8 m ²)	'86.9.8~13	溝(弥生中期)
F5h地区	"	28m ² (19.5 m ²)	'86.9.16~25	溝、柱穴群(弥生中期・中世)

昭和61年度板付下水道関係調査一覧

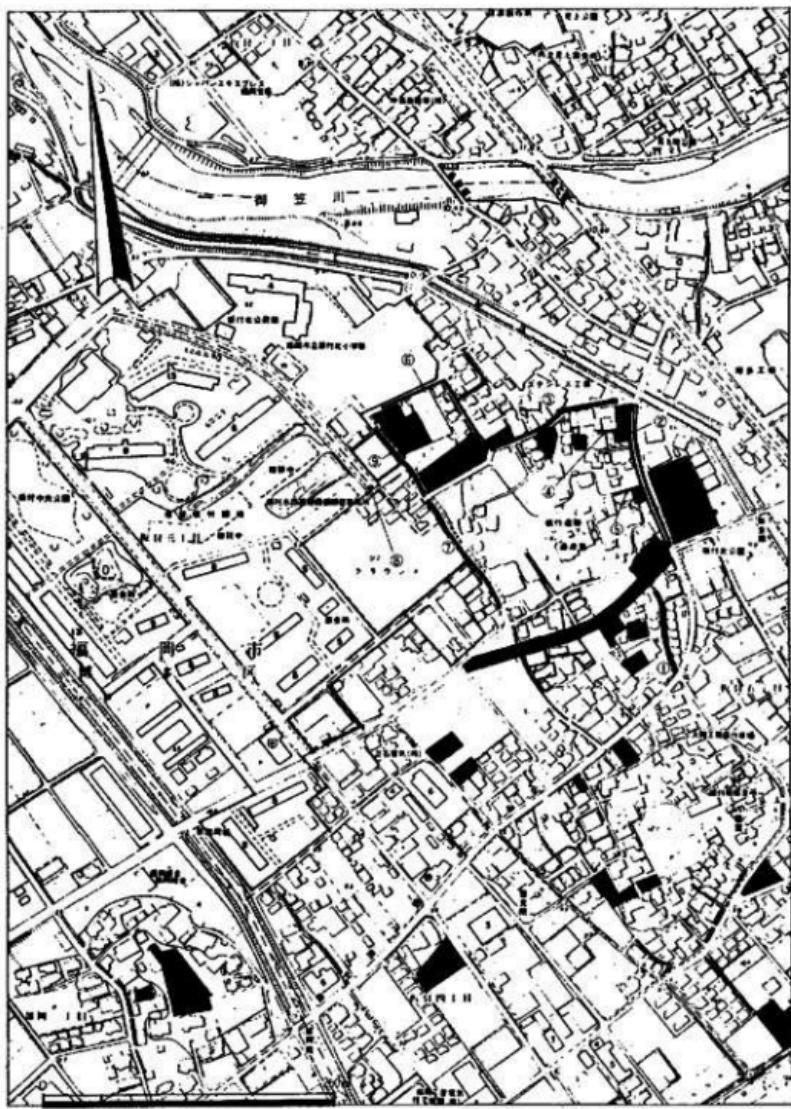


Fig. 1 板付地区下水道調査地区図

① : E7a区 ② : F5d区 ③ : F5e区 ④ : F5g区 ⑤ : F5h区
(①+②)-1984年度、③-⑦-1985年度、④-⑥-⑧-⑨-1986年度)
⑥ : G4a区 ⑦ : G6a区 ⑧ : H5a区 ⑨ : H5c区

II H5b地区の調査

位置：中央台地の西縁の北西端部に位置し、環溝造構より北西に120mの地点である。東側に隣接するH5a地区では台地縁が把握されており、本地区はこれに統く冲積地にあたる。

層序：銅矢板による調査区の工作的に図示することが出来ないが、層位的調査の観察によれば、基本的には本地区から北東50mのH5c地区 (Fig. 4 参照) と同様であり、特に造構検出面である第IV層の上端面が標高7.2m前後で共通する内容をもっている。

遺構：調査区東端部で南北に走る小溝 (SD01) 1条を検出した。溝は第IIIc層 (灰~灰白色微砂質粘土) 除去後に第IV層 (黒色粘質土) 上面で確認した。幅員60cm、深さ30cmをはかり、断面逆台形となる。溝埋土は灰白色微砂の單一層である。

出土遺物：各層より出土した遺物類は極めて量的に少なく、また図示可能なものは多くない。第II層 (灰褐色粘質土) では糸切り離しの土師皿片、また第III層では弥生時代後期上器片などが出土している。

図示した遺物類 (Fig. 3) は001・002が第IV層、003・004がSD01溝出土である。またこれ以外に、隣接するH5a地区で第IV層に関連すると考えられる資料を参考にあげた。

001は變形土器口縁で外端部を欠損するが、上端は小さい平端面をなすと考えられる。調整は外面横ナデ、内面は指おさえ後に横ナデを施す。器色は内外面ともに淡褐色を呈し、胎土に細砂の混入多いが焼成堅緻である。002は小型壺底部である。内外面ともに器面の荒れが著しく調整は不明である。器色は外面淡赤褐色、内面暗褐色を呈する。胎土は細砂の混入多く、軟質である。底径4cm。003は變形土器削部片である。

調整は外面縦方向のヘラケズリ、内面縦横のナデを施す。内面に煤が厚く付着し、器色内外面ともに黒褐色を呈する。胎土に砂の混入は少なく、焼成は堅緻である。004は小型壺口縁である。口縁端部はほぼ直口し、稜角的に仕あげる。調整は内面横ナデ、内面窓状工具による横位のナデを施す。器色は内外面ともに淡褐色を呈し、外面丹塗りである。胎土は若干の粗砂を混入するが薄で、焼成堅緻である。

次に参考資料として挙げたH5a地区の「包含層」出土々器は夜臼式土器～板付I式土器（前期末）までの變形土器である。1～5が夜臼式土器、6が板付I式壺、7～9が前期中葉、10

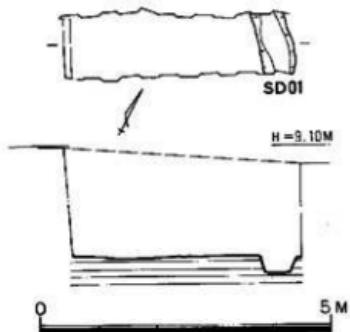


Fig. 2 H5b地区造構出土状況図 (1:100)

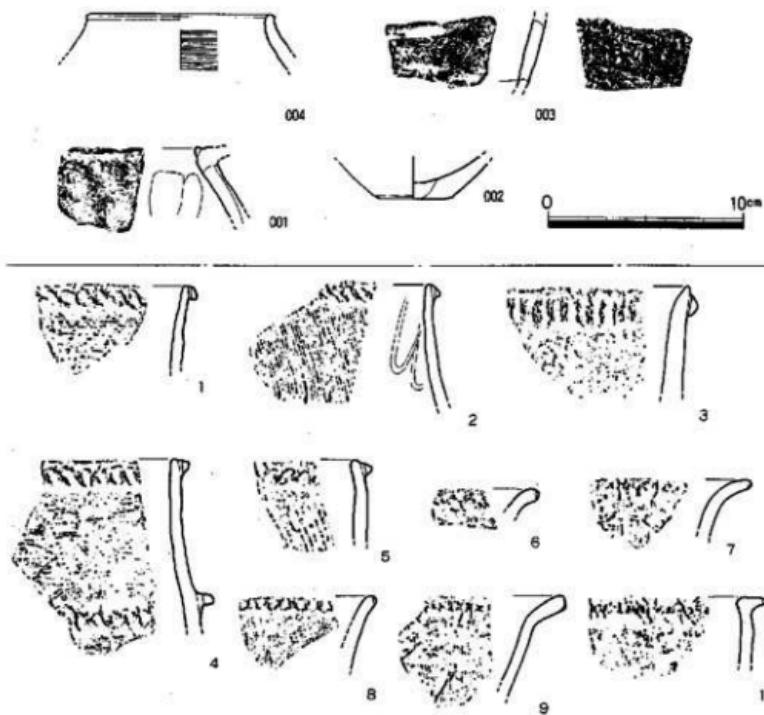


Fig. 3 H5b地区出土遺物実測図 (1:3)

が前期末に位置づけられよう。

小結

H5b地区はこれまで述べた様に中央台地の西縁北西部にひろがる冲積地にあり、検出した南北小溝は水田灌漑に伴う施設と考えられる。隣接する造構は南側に隣接する板付市営住宅建設に伴う第2調査区（付図1、J21~24、J-K25地区）で確認されている。ここで検出された水利・畦畔に伴う矢板列の現存頂部標高もまた7.0mを前後するもので、層位的には第Ⅲ層（黒色粘質土）上面から打込まれたと考えられる。また第Ⅳ層からは夜白・板付I式土器の出土があって弥生時代前期の所産と考えて良く、H5b地区も同時期の水田遺跡の一端とすることができよう。

III H5c地区の調査

位置 (Fig. 1・付図 1) H5c地区は中央台地西縁部に位置し、環溝造構から北西に70~140mにある。昭和60年度に調査したG6b地区の北端部に連続する。

層序 (Fig. 4) 調査区各地点での土層観察は困難であったが、第4区では特徴的な成果があった。本地区的層序は中央台地北縁部冲積部での平均的なものと考えられる。

現在道路面は標高9mをはかり、この下に道路敷覆土が約60cm程度ある。第I層は上面が標高8.30m前後であり、上部より旧水田耕作土（青灰色砂質土、8~10cm）・床土（黄褐色砂質土、5cm）・黄灰色粗砂層となり、現代水田形成前の氾濫が観察される。

第II層は灰褐色粘質土では層厚20cm程度の水平堆積となっている。上面はほぼ標高8.10mである。層中には酸化鉄、マンガンが斑紋状にみえる。調査では時期的に奈良時代以降と考えられる布目瓦破片・須恵器小破片が出土した。続く第III層と第II層との間には薄層であるが砂層2枚が挟まっている。上部より黄白色粗砂（約10cm）・赤褐色微砂（3~4cm、鉄分の沈着が顕著）である。

第III層は上面の標高が7.80mで層厚70~75cm程度の灰~灰白色微砂質粘土であるが、2枚の薄い粗砂質粘土を挟んで3層（IIIa、IIIb、IIIc）に区別することができる。IIIa層は灰白色微砂質粘土（25cm）で続くIIIb層との間に3~5cm程度の灰色粗砂質粘土を挟む。IIIb層は灰色微砂質

粘土でIIIa層に比較してやや暗い。次のIIIc層との間には層厚7cm程度の灰色粗砂質粘土が挟まる。IIIc層はIIIb層とは同色同質であり、層厚15~18cm程度である。上部で弥生時代中期の土器類が出土した。

第IV層は地山直上にのる黒色粘質土である。層厚15cm程度で北側に向って厚くなる。上面での標高は7.10m程度でこれまでに調査された周辺部の弥生時代前期の水田施設の上端面レベルと共通する数値となる。

第V層は地山層で、灰白色粘土（八女粘土）である。

H5c地区では調査区南端部を除いて、第II層は台地部で地山上面直上をおおっている。また台地部と冲積部との境付近で第IV層（黒色粘質土）が出現するのは調査区第4区の南端から北へ

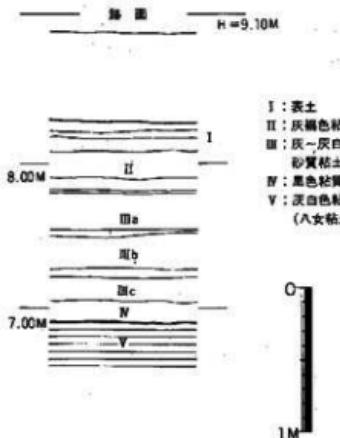


Fig. 4 H5c地区土層図 (1:40)

11~11.5m行った地点であり、第III層の開始は南側の第3区内に及ぶ可能性が高い。

遺構 (Fig. 5・6) H5c地区では後述する弥生時代妻棺墓の遺存状況などから推察すれば第1区で1m以上、第2・3区では数十cmを越えない程度の削平が行なわれたと考えられる。従って調査区各区でも遺構の遺存は良くない。以下各区の状況について述べる。

第1・2区 遺構検出面は茶褐色ローム（鳥栖ローム下部面）で、標高8m前後を測る。南端部東壁付近は旧排水路の西側肩口部分で占められており、この状況は第1区東壁全体にみられる。遺構は妻棺墓2基および北端部で小ピット6個である。小ピットは直径15~40cm深さ20~50cm程度のもので埋土は何れも暗灰褐色粘質土であり、弥生式土器小破片が数点づつ出土したがまとまりとして把握できなかった。

妻棺墓 (Fig. 5・7, PL. 7) 全体の半分以上を削平された2基を検出したが、東側に隣接するG5a地区（1975年調査）の弥生時代墓域が更に西側に拡がっていることが理解できた。

SK01妻棺墓 (Fig. 5・7, PL. 7) 調査区中央部東壁で検出した。非常に削平のために特に上妻は遺存が悪く、墓擴は確認できない。上・下棺とともに大型複形土器を使用し、主軸をN-Eにとる。上妻は口縁部の内方への発達が良好である。外口径57cm、内口径44cmをはかる。器色は淡褐色を呈し、調整は器面の磨減がいちじるしい。胎土は細砂を多く含み、やや粗である。

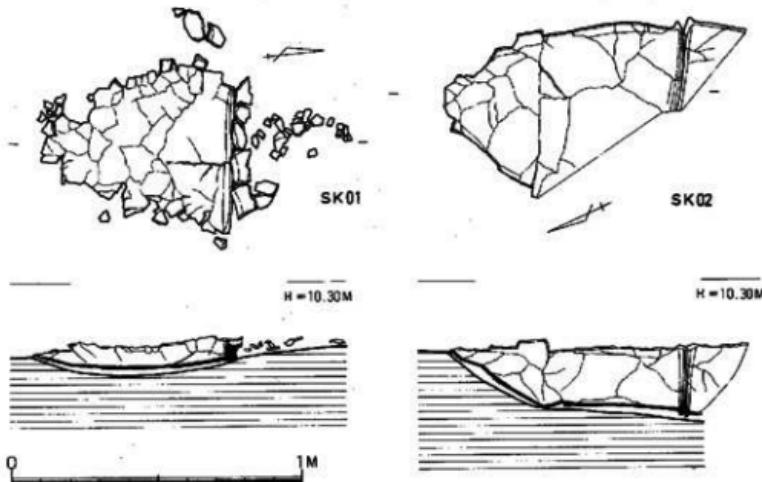


Fig. 5 SK01-02妻棺墓出土状況図 (1:20)

图6 H50地区道路出土地质图 (1:100)

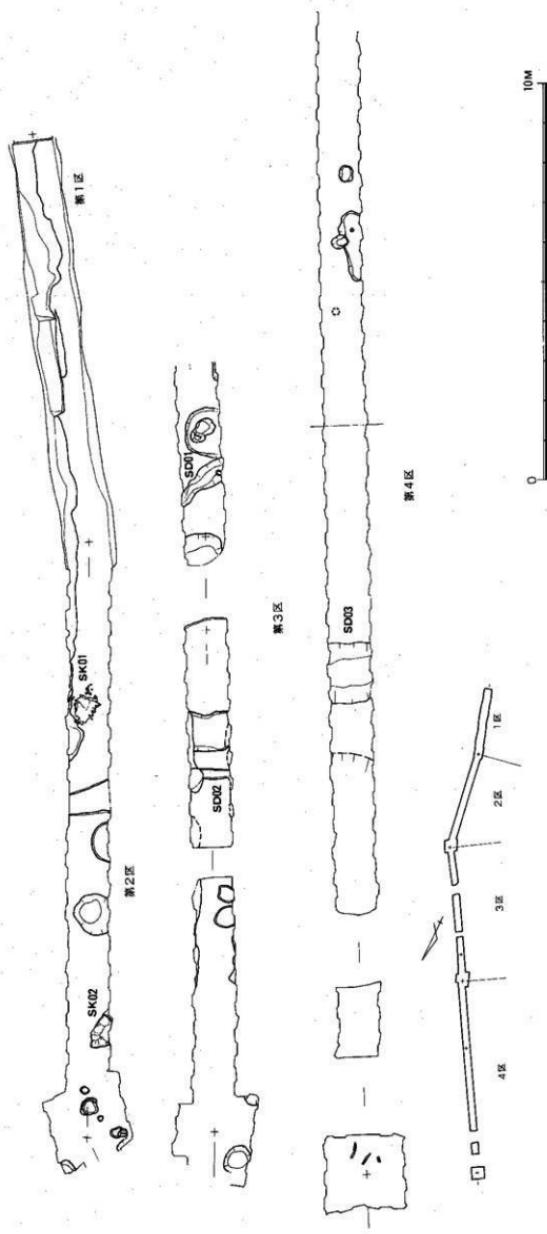
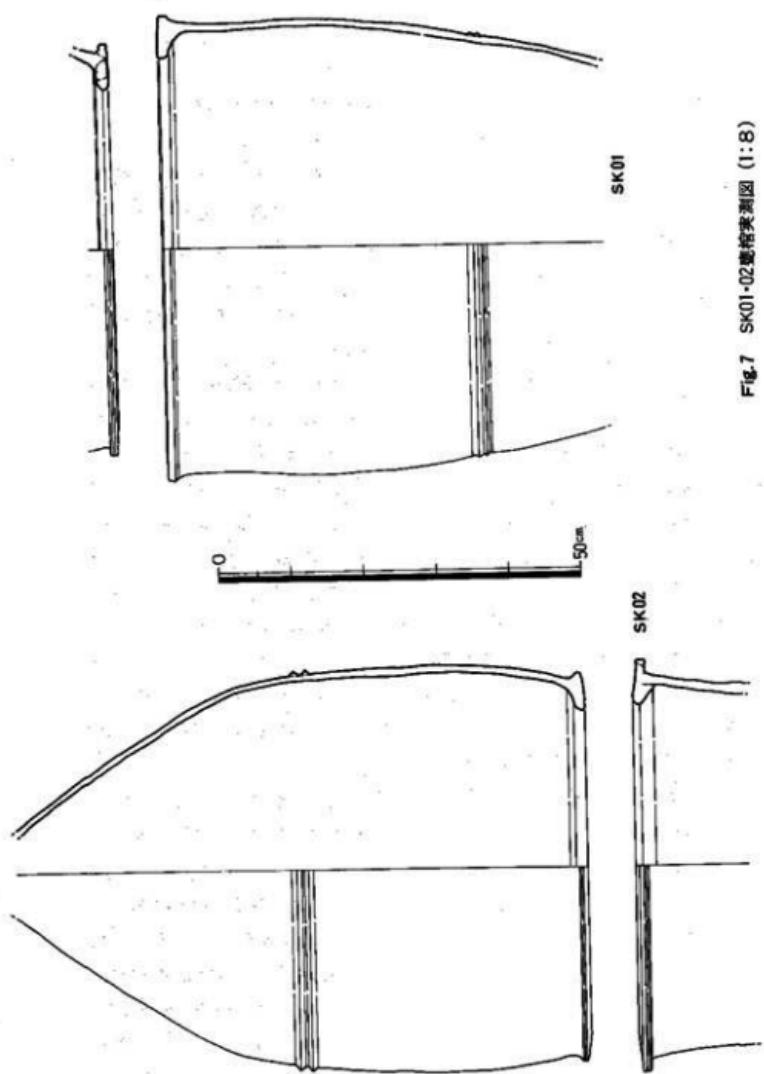


Fig. 7 SK01・02墓棺測図 (1:8)



下部は口縁部が上部と同様の特徴を有し、やや薄手のつくりである。胸部のはば中位に低い2条の三角突帯をめぐらす。内口径53cm、外口径64.5cmをはかる。器色は内外面ともに淡褐色を呈し、調整不明である。胎土は細砂を多く含み、密である。

SK02甕棺墓 (Fig. 5・7、PL. 7) SK01甕棺墓の北側8mの西壁で検出した。下棺の殆どは調査区外となっている。主軸をN-24°-Eにとり、約10度で埋置されている。棺は上・下棺とともに大型の變形土器を使用する。上部は口縁部のつくりが全体薄手できしゃしゃである。胸部中位にやや大型の三角突帯2条を施し、これ以上の胸部はほぼ垂直に立あがり、口縁部付近で内傾する。器色は暗赤褐色を呈し、調整は器面の荒れのため不詳である。胎土は細～粗砂の混入が多く、やや粗である。内口縁部がわずかに遺存している。口縁部内唇が非常に肥厚する。器色は外面暗赤褐色、内面黒褐色を呈する。調整は荒れのため不詳である。胎土は細～粗砂を非常に多く混入し粗である。内口径44.6cm、外口径57cmをはかる。

第3区 小ピット5個、溝状遺構2条を検出した。小ピットは直径30～40cm、深さ20cm程度である。溝状遺構は幅30～40cm、深さ10cmに満たない東西に走る小溝である(SD01・02)。これらは何れも埋土が暗灰褐色粘質土であり、遺物は弥生式土器網片が数点したのみである。本区は地山面の南端で標高8.3m、北端で標高7.8mとなり、北側に向って緩やかに傾斜する。

第4区 地山は中央部以北は灰白色粘土(八女粘土)となり、南端より11m北側の部分で第IV層(黒色粘質土)が始まる。遺構は調査区南半部で小ピット4個、土壙1基(SK01)および調査区中央部の第IV層上面より切り込んだ東西溝(SD03)1条を検出した。小ピットは直径40～30cm、深さ10～50cmをはかる。土壙(SK01)は長径80cm、短径30cm以上、深さ10cmの規模である。これらは何れも埋土は暗灰褐色粘質土である。

SD03溝 (Fig. 6・8) 上端幅1.5m、下底部幅30cm、深さ35cmを測る東西溝である。横断面は逆台形を呈する。埋土は灰白色シルトと同色の砂土の混在土であり、底面付近には灰白色粗砂が堆積する。埋土中より少量の遺物が出土した。

本溝は東側に隣接するG・H5地区で検出された第2号溝と連絡すると考えられる。

出土遺物 (Fig. 8・9) 本溝出土の遺物類のうち図化可能ものは少なく、他にG・H5地区第2号溝出土遺物(1～8)を参考資料として掲載した。

023は甕形上器口縁破片である。器色は内外面ともに暗褐色を呈する。調整は外面横ナデ、内面は細い斜め刷毛目を施す。胎土に細砂を多量に混入し、焼成堅緻である。024は不明土製品である。粘土小塊の中央部が三角形に盛りあがり、裏面は平坦面をなす。両側辺中央を指でつまみ出して突出部をつくり出す。器色は淡褐色を呈し、胎土粗、焼成堅緻である。025は小型石ノミの可能性がある。頭部を欠損する。刃部は片刃に研ぎ出される。長さ4.6cm以上、幅2.1cm、厚さ0.7cmをはかる。砂岩製。他に020・021・022(Fig. 9)の出土がある。

1～3・6・8は甕形土器である。1は器色内外面ともに黒色を呈し、調整は横ヘラミガキ

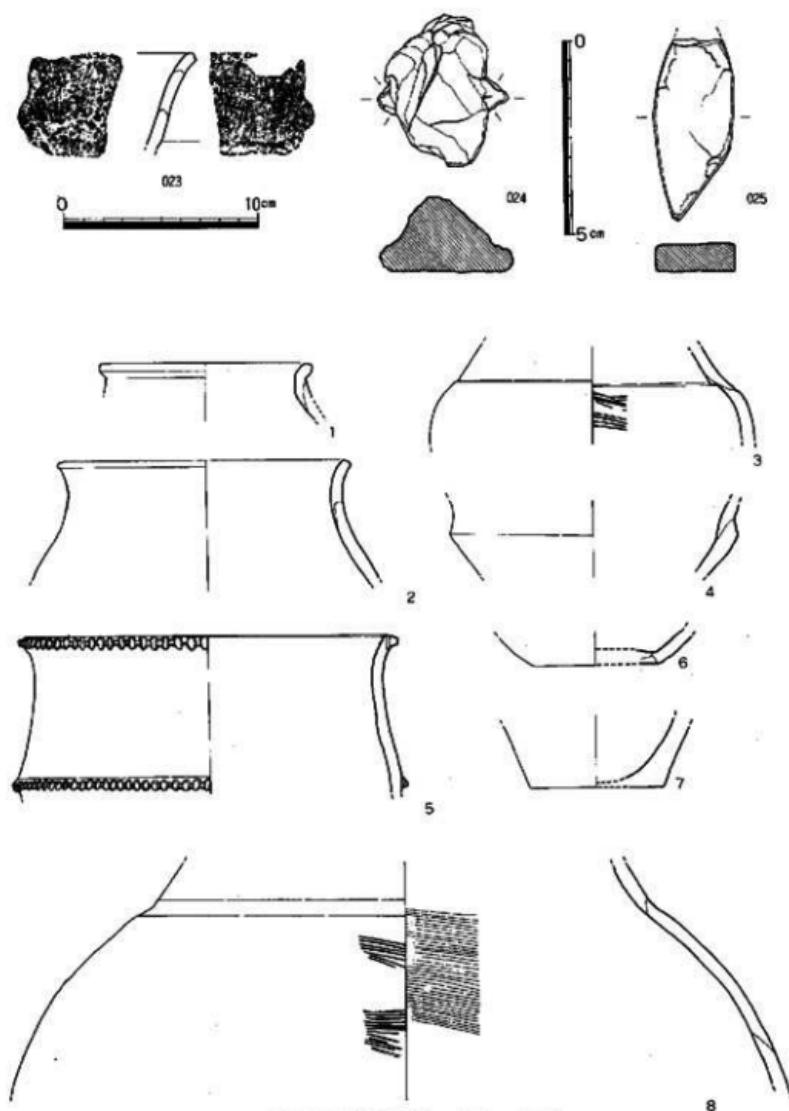


Fig. 8 SD03溝出土遺物実測図 (1:3・2:3)

である。胎土は非常に密である。焼成は堅緻である。口径13cmをはかる。2は器色内外面ともに黒色を呈し、丹塗りである。調整は内外面ともに横ヘラミガキを施す。胎土密で、焼成堅緻である。口径14.8cmである。3は胴・頸部の接合痕が内面に段状に残る。器色は外面灰褐色、内面黒色を呈する。調整は外面横ヘラミガキ、内面は朱痕を一部に残し、他は横ナデである。胎土密、焼成堅緻である。6も壺底部か。8は大型壺である。器色は褐色を呈し、外面丹塗りである。頸部下端はつよいヘラナデによって緩く窪む。調整は外面が粗い横刷毛目調整後に横ヘラミガキ、内面は粗い横刷毛目調整である。胎土に細砂の混入多く、粗である。焼成堅緻である。

5・7は瓊形土器である。5は胴部で屈曲し、内傾する口縁を有する夜白式土器甕である。口縁・胴部の突起は何れも幅ひろく端正な刻目を施す。器色は褐色を呈し、外面および内面の上半部丹塗りである。調整は内外面ともに横ナデである。胎土密で、焼成堅緻である。口径19.4cmをはかる。7は器色外面暗赤褐色、内面黒～褐色を呈する。胎土粗で、焼成軟質である。

4は高环々部か。器色は内外面とも暗黄褐色を呈する。調整は外面朱痕、内面横ナデである。胎土は細砂の混入が多く、粗である。焼成軟質である。

包含層出土の遺物 (Fig.9・10)

包含層では第II、III、IV層での出土が目立った。ここでは第IV層のものから個別に説明を加える事とする。

①第IV層（黒色粘質土）上面出土の遺物 (Fig.9-013~018、Fig.10-160)

013は口縁が直線的に外方に開く夜白式甕である。口縁部の刻目は荒く幅ひろい。器色は外面淡褐色、内面暗褐色を呈する。調整は外面横位の朱痕・内面は朱痕後に横ナデを施す。胎土は粗で、焼成堅緻である。口径24cm。014も同様の形状をなす甕である。器色は淡褐色を呈する。調整は外面が窓状のもので横ケズリ、内面横ナデである。胎土は密で、焼成堅緻である。015は内傾する口縁を有する甕である。器色は内外面ともに暗褐色を呈する。調整は外面が荒い横位の朱痕、内面ナデである。胎土は密で、焼成堅緻である。016も内傾する口縁部を有するが、端部が肉薄になる直口縁外端に直接刻目を施す。器色は淡褐～淡黄褐色を呈する。調整は外面がナデ、内面指ナデあげである。胎土は密で、焼成堅緻である。017は底部端を欠失する夜白式甕である。器色は淡褐色を呈し、調整は横ナデである。胎土はやや粗で、焼成軟質である。018は小型甕である。頸部接合内面に明顯な段を有する。器色は淡黒色を呈し、内面横ナデか。胎土密で、焼成堅緻である。160は夜白式甕底部である。底部外面に木葉痕が残る。器色は淡赤褐色を呈する。内面に指おさえが顯著である。胎土は粗で、焼成軟質である。底径8.2cm。

②第三層（灰～灰白色微砂質粘土）出土の遺物 (Fig.9-005~012・019、Fig.10-134・136~138・141・142・146・148・150・151・159)

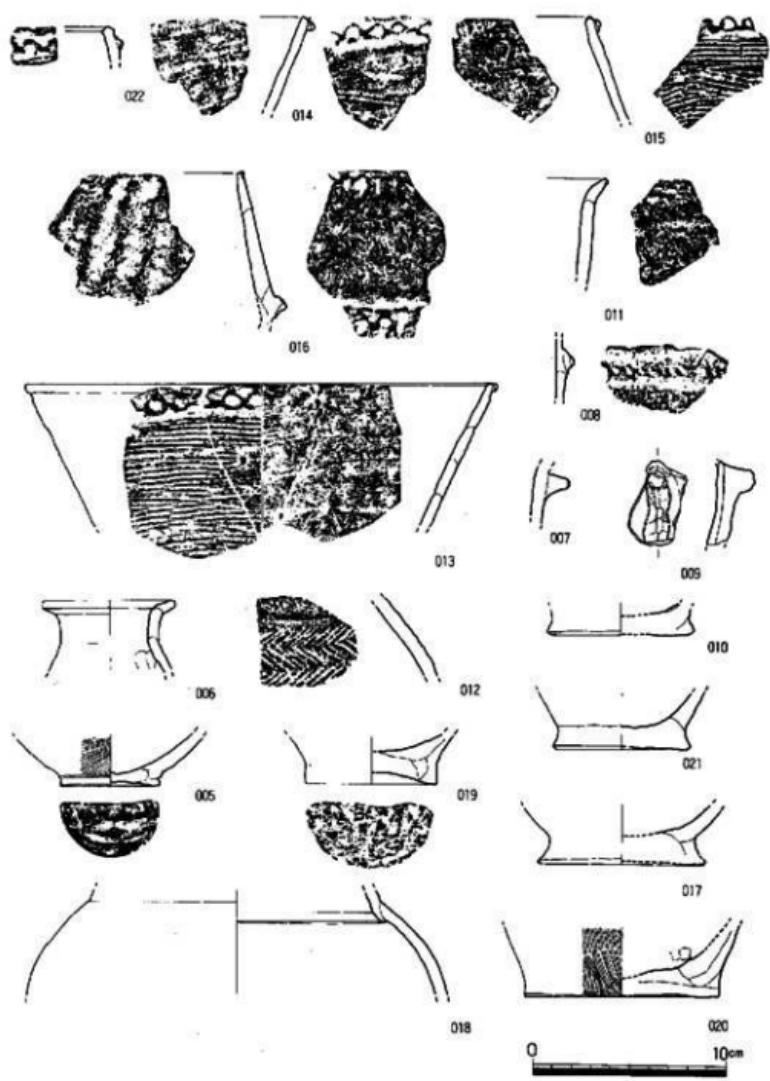


Fig. 9 H5o地区出土遺物実測図(1) (1:3)

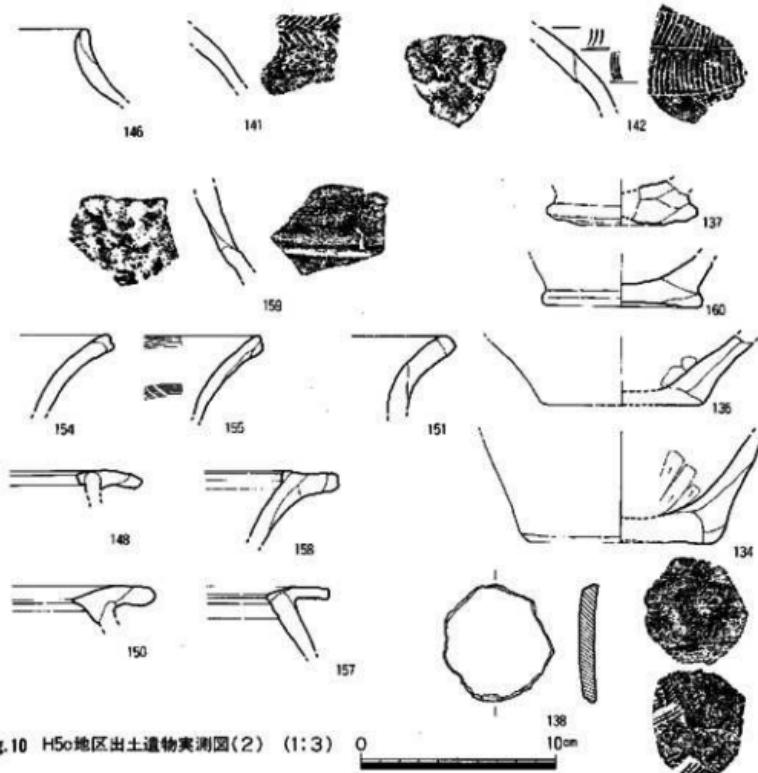


Fig. 10 H50地区出土遺物実測図(2) (1:3) 〇

005は小型壺である。円盤貼付の手法を良く残す。器色は淡黒灰色を呈する。調整は外面に斜めの丁寧なヘラミガキを施す。胎上は密で、焼成堅緻である。底径5cm。006も小型壺である。直立する頸部に小さく外開する口縁をのせる。器色淡褐色を呈し、外面横ナデ、内面胴部に指おさえが残る。胎土は密で、焼成堅緻である。007は胴部三角突帯に細かい刻口を有する。外面は赤褐色を呈する。008も低い三角突帯に細かい刻口を施す、外面暗褐色を呈し、調整は横位の条痕である。009は器種不明であるが鉢形の様な小型のものとなろう。器壁3mmの外面に粘塊を貼付け、瘤状の把手をつくり出している。器色淡赤褐色を呈し、胎土粗、焼成堅緻である。010は夜臼式甕である。器色は暗褐色を呈し、胎土粗、焼成堅緻である。011は板付II式甕である。口唇下端に刻口を施す。器色は暗褐色を呈する。胎土は細砂の混入多く、密である。焼成堅緻である。012は肩部に無軸羽状文を施した甕である。外面淡赤褐色、内面淡褐色を呈する。胎土

粗で、焼成堅緻である。019は夜白式土器壺である。底部は上底で外底部にヘラケズリ、他はナデ調整である。外面淡赤褐色を呈する。胎土粗で、焼成軟質である。134は壺底部か。外面淡黄褐色を呈し、胎土粗、焼成堅緻である。内面ヘラナデ。136は壺底部である。全体に磨滅が著しい。外面淡褐色を呈する。胎土密で、焼成堅緻である。137は夜白式壺である。外底部ヘラケズリである。器色暗褐色を呈し、胎土粗、焼成軟質である。138は壺形上器片利用の土製品である。周辺に打刹が頗者である。表面ヘラ磨き、裏面に荒い刷毛目調整を残す。141は肩部に無輪羽状文を施す壺である。器色淡黄褐色で、胎土粗、焼成軟質である。142は肩部に有輪羽状文を施す壺である。内面に接合痕を明瞭に残す。外面暗褐色を呈し、胎土粗、焼成軟質である。148は壺口縁である。淡褐色を呈し、胎土粗、焼成堅緻である。149は口縁外端の発達した壺である。淡褐色を呈し、胎土粗、焼成軟質である。150は口縁上端が内傾する壺である。淡褐色を呈し、胎土粗、焼成軟質である。151は口縁が朝顔状に開く壺である。外面淡黄褐色を呈し、ヨコナデを施す。胎土粗で、焼成軟質である。159は壺頭部である。外面は横ヘラミガキを施し、境界は段をなす。内面は指おさえである。外面淡褐色を呈し、丹塗りである、胎土粗で、焼成堅緻である。

③第II層出土の遺物 (Fig.10-154・155・157・158)

154は口縁が朝顔状を呈する壺である。外面淡褐色を呈し、調整は内外面ともに横ナデを施す。胎土密で、焼成堅緻である。155は154と同様の壺である。内外面ともに丹塗りである。内面に横ナデが残る。胎土密で焼成堅緻である。157は口縁部上端が内傾する壺である。器色淡灰褐色を呈し、丹塗りを施す。外面横ナデで、胎土密、焼成軟質である。158は口縁が朝顔状にひらき、上端部が平坦となる壺である。器色は淡褐色で、全面丹塗りである。胎土は粗で、焼成堅緻である。

小結

H5c地区はこれまで述べた様に調査区南側で弥生時代中期前半代の墓地およびこれ以降の生活遺構の一端に触ることが出来た。また北側部分では弥生時代前期の水田址に伴うと考えられる溝を検出し、更にこの中央台地北端部でこの時期の水田耕土と考えられる第IV層（黒色粘質土）のひろがりをつかむことができたのは成果とせねばならないであろう。

IV G4a地区の調査

位置 (付図1) G4a地区は中央台地と北台地にまたがる東西(第1・3区)、南北(第2・4区)方向の調査区である。第1区は環溝から北へ140m、第2区南端に55mの地点で東・西でそれぞれG5b・G5a地区と隣接する。

層序 冲積部と台地部分とがあり、冲積部はH5c地区(Fig. 4)と同様である。第2区南半部は台地となり、第I層—表土、第II層—灰褐色粘質土、第III層—茶褐色ローム(鳥栖ローム層)となり、第II層直下で遺構が検出された。

遺構 本調査区は立合い調査であったため十分な遺構の検出が困難であったが、ここでは可能な限り各区の状況観察について述べることとする。

第1区 東西60mの調査区では東端部より西側へ10m付近まで平均的堆積(Fig. 4)がみられ第IV層からも土器類の出土はまとまってあった。併しこれ以西では第II層(灰褐色粘土質土)以下は1m以上の褐~褐色白色粗砂となり、激しい氾濫を示している。この流れは調査区東北部から南西部に向っており、北台地調査区の南端段おち部分は北岸にあたるものと考えられる。また粗砂層下は灰白色ローム(八女粘土)となる部分と第IV層が部分的に残る部分がある。粗砂層最上部では須恵器細片を探集した。

第2区 南北76mに亘る調査区である。調査区北端部から南側へ30mの地点で台地との境界が確認された。また台地段落ちから南側へ11mの地点で井戸1基を確認した。またこれ以南はわずかに地山面は上界するものの遺構は数個の小ビットが見付かったにとどまる。冲積部分は第1区と同様に第IV層からの土器類の出土が顕著であった。

井戸址 (付図1参照)前記の位置で東壁に寄つて見付かった。井戸址は直径80~100cm、深さ150cm以上の規模であり、鳥栖ロームから八女粘土上部まで掘込んでいる。井戸埋土は暗灰色粘質土で下部では八女粘土ブロックを多く含み、木片も散発的に出土した。埋土から土師器4個体とともに弥生前・中期土器片も出土した。

出土土器 (Fig.11-026~029, PL. 8)

026は口縁の直立する尖底の甕である。器色は外面口縁部付近で淡褐色を呈し、胸部は全面厚く煤が付着する。内面は暗褐色である。調整は外面で口縁・胴部上端部で横ナデ、胴部中位で一部に細かい横刷毛目を残す。下部は荒い縱刷毛目調整である。口縁内面は横ナデ、胴部内面は全て縱刷毛目調整であり、内底部は刷毛目をナデ消している。胎土に細砂の混入多く、粗である。焼成はやや軟質である。口径17cm、器高28.2cmをはかる。027は頸部が良くしまり、口縁内湾気味に外反する薄手の布留式土器甕である。器色は外面淡黄褐色、内面淡褐色を呈する。調整は外面で口縁横ナデ、胴部細かい縱刷毛目を施す。内面は口縁横ナデ、胴部で底部から上方へのヘラケズリを施す。胎土に細砂の混入多く、焼成堅緻である。口径19cm。028は底部およ

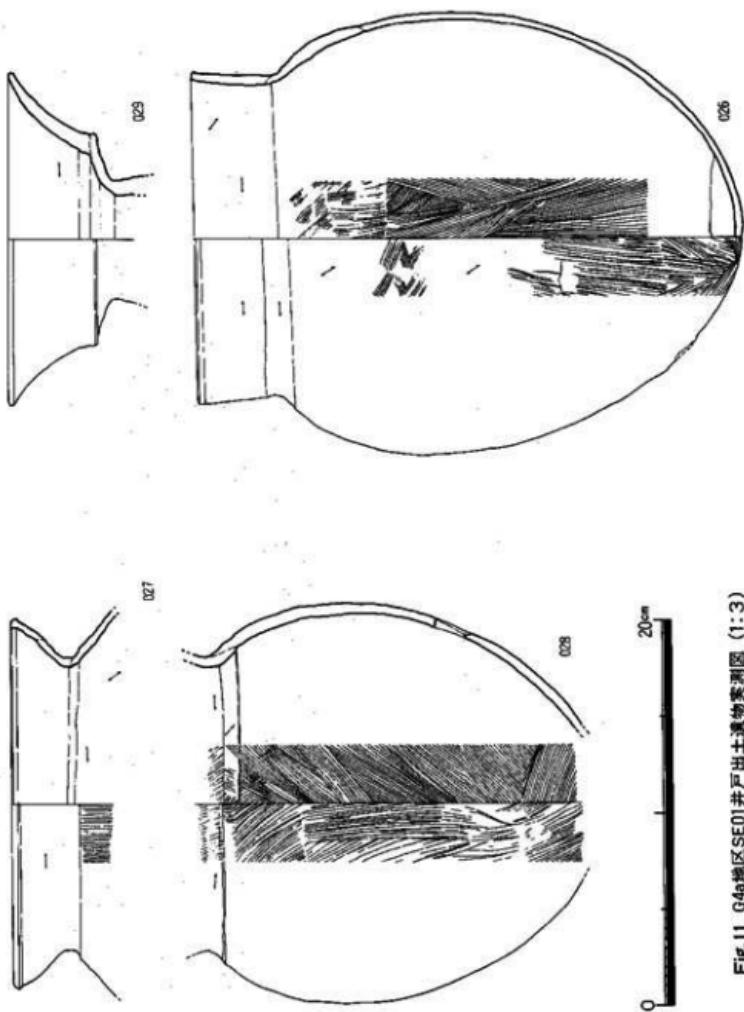


Fig. 11 G4a地区SE01井戸出土遺物測量図 (1:3)

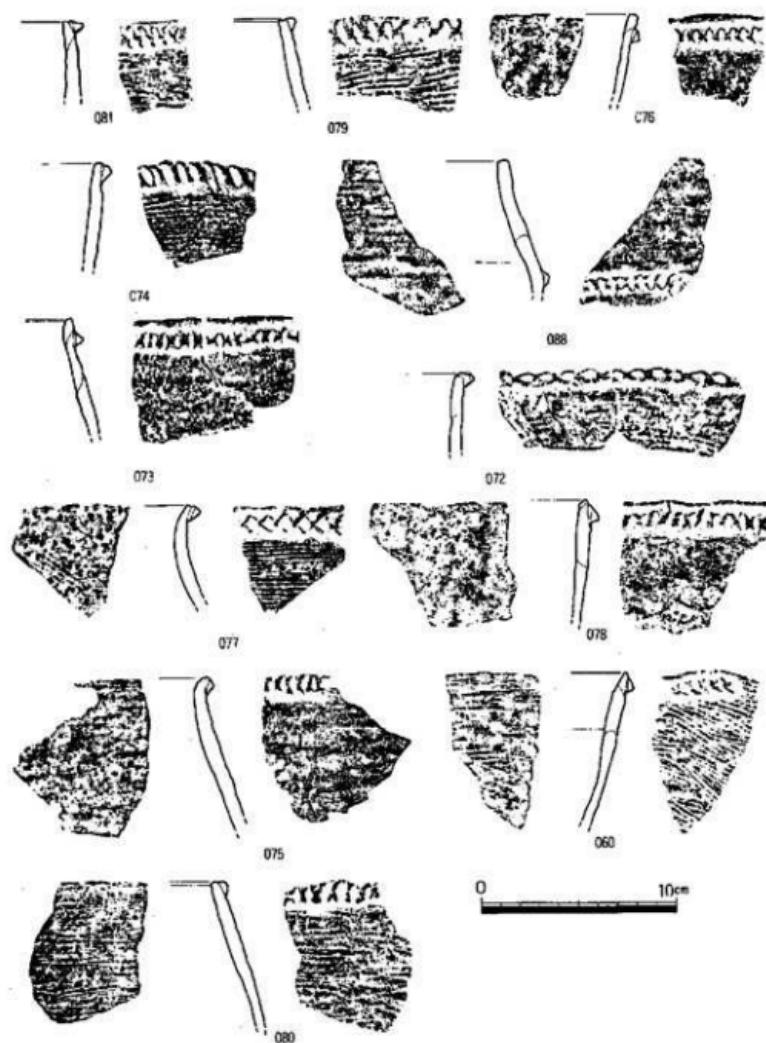


Fig. 12 G4a地区出土遗物实测图(1) (1:3)

び口縁端部を失する壺である。口縁は残存部で推定すれば素直に外方に開く形態となろう。胴部中位に外方よりの二次的穿孔がみられる。胴部下半には煤付着するが上半外面・内面は淡赤褐色を呈する。調整は外面縦刷毛目後口縁下端部に強い横ナデを加える。内面も細かい斜め刷毛目調整後口縁下端に横ナデを施す。刷毛目工具の端部幅は1.5cm程である。胎土には粗砂の混入多く、焼成堅緻である。胴部最大径20.3cm。028は二重口縁壺である。器色は外面淡褐色、内面黒色である。調整は外面口縁で横ナデ後縦ミガキ、頸部横ミガキあるいはナデである。内面は横ミガキを施す。胎土に石英細砂の混入多く、焼成は軟質である。口径17cm。

第3・4区 本調査区は東西（第3区－30m）・南北（第4区－34m）の64mに及ぶ。両区は何れも冲積部にあたり、H5c地区でみられた層序（Fig.4）を観察することができた。遺物類は中央台地縁辺部に近い第3区第IV層での出土量が多く、これより離れる第4区では非常に少量の出土であった。また第1区で確認された粗砂の流れ（旧河川）は第4区北端部で検出できず、更にこれの北側を通過するものと考えられる。

包含層出土の遺物（Fig.12～14、PL.8）

立合い調査のため層序を確認し乍らの遺物採集であったため十分には分層的に遺物を区別していない。地区ないでは第1区東半・第2区北半部および第3区の第IV層を中心とする包含層からの出土が多かった。

① 第IV層（黒色粘質土）出土の遺物（Fig.12-060・072～081・088、Fig.13-034・048・066～068・071・090～092、Fig.14-043・050・053・054・058・070・082・083・085、Fig.15-032・035・047・049・051・056・057・059・061～065・069・086・087）

060は口縁端部よりややくだった位置に刻目突帯を付す壺である。器色は内面淡褐色で、外面煤付着する。調整は外面斜めの条痕、内面横・斜めナデを施す。胎土密である。072は直口する口縁端に深い刻目突帯をめぐらす。外面黒褐色で、淡赤褐色を呈する。調整は外面横位の条痕である。胎土粗で、焼成堅緻である。073は口縁端より1cm程くだった位置に精緻な刻目突帯をめぐらす。外面暗褐色、内面淡褐色～黒褐色を呈する。内面調整は指おさえ後にナデを加える。胎土密で、焼成堅緻である。074は口縁端部に深い刻目突帯をめぐらす。外面煤付着し、内面黒褐色を呈する。外面横位の条痕、内面縱位のナデ調整である。胎土粗で、焼成堅緻である。075は内傾する口縁端部に深く、全体に及ぶ刻目突帯をめぐらす。外面暗褐色、内面淡褐色を呈する。調整は外面ともに横位のヘラナデである。胎土密で、焼成堅緻である。076は口縁端よりややくだった位置に突帯をめぐらす薄手の壺である。器色黒褐色で、胎土密、焼成堅緻である。077は内傾気味に外反する口縁端部に深い刻目突帯をめぐらす、器色淡褐色を呈する。外面横位の条痕、内面は一部に横ナデを施す。胎土密で、焼成堅緻である。078は口縁端から斜めに下った位置に突帯をめぐらす。外面煤付着し、内面淡褐色である。内面横ナデで、胎土密、焼成堅緻である。

18

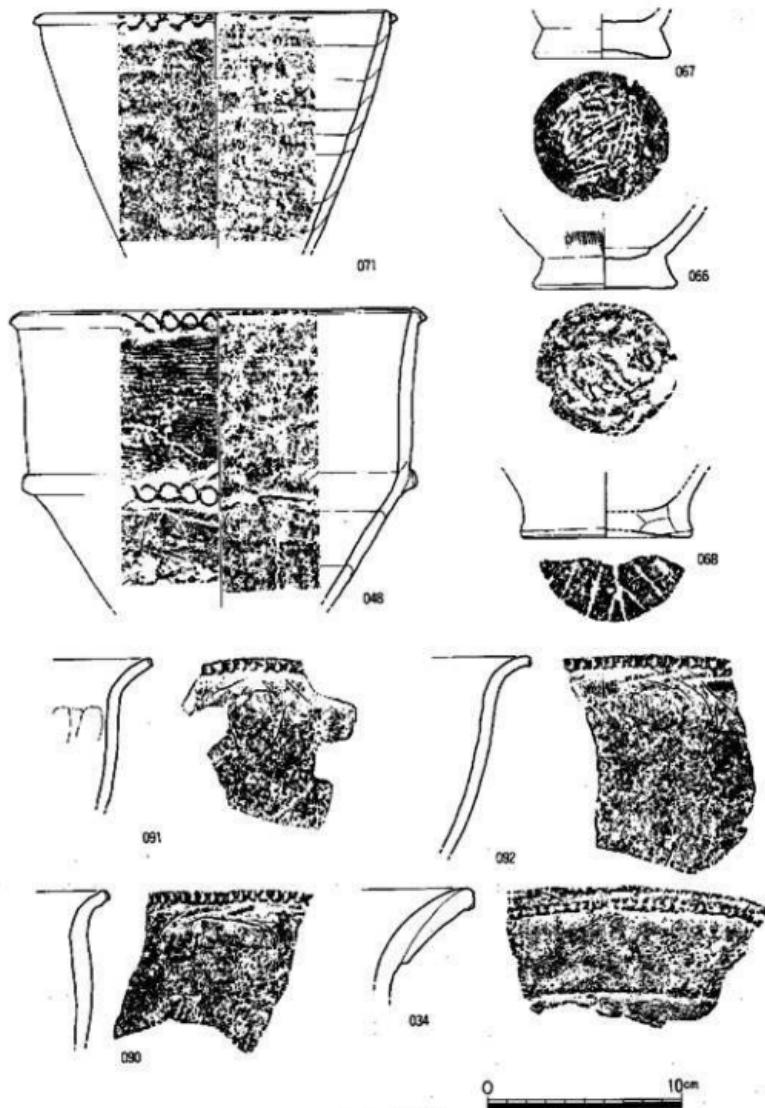


Fig.13 G4a地区出土遗物实测图(2) (1:3)

級である。078は口縁端部に深い、規則的な刻目突帯をめぐらす。外面煤付着し、内面淡赤褐色である。外面横条痕で、胎土粗、焼成堅緻である。080は内傾する口縁端部に刻目突帯をめぐらす。外面煤付着し、内面淡赤褐色である。外面斜め、内面横立の条痕調整。胎土粗で焼成堅緻である。081は端正な刻目を施す。外面に煤付着する。内面横ナデで、胎土密、焼成堅緻である。082は内傾する口縁を有し、端部の突帯・刻目を施さない。外面黒褐色、内面淡褐色である。調整は内・外面とも横ヘラミガキである。胎土密で、焼成堅緻である。034は口縁端部が肥厚する壺で、下端部に細かい刻目を施す。外面淡赤褐色、内面淡褐色である。胎土粗で、焼成堅緻である。048は口縁、胴屈曲部に刻目突帯をめぐらす。外面煤付着し、内面淡灰褐色。外面上半横位条痕、下半ナデで、内面ナデである。胎土粗で、焼成軟質。086は夜白式腹底部である。器色暗褐色で、外面条痕および外底部にヘラケズリ。胎土粗で、焼成軟質である。087も同式腹である。器色暗褐色で、外底部に条痕を残す。胎土密で、焼成軟質である。088は壺底部か。外面淡灰褐色、内面淡赤褐色である。外底に木葉痕あり。胎土粗で、焼成軟質である。071は胴が直線的に外方に開く壺で内外面ともに横ナデ調整である。器色暗赤褐色である。胎土密で、焼成堅緻。口径17.2cm。089は板付I式腹である。器色淡褐色で、内面ナデ調整である。胎土密で、焼成堅緻である。091も同様の腹である。外面淡灰褐色、内面淡褐色。内面一部に指おさえが見られる。胎土密、焼成堅緻。092は口縁下端に刻目を施した板付II式腹である。器色淡褐色で、調整は、内外面ともにナデをほどこす。胎土密で焼成堅緻である。043は大型壺で内傾する口縁は端部で小さく外反する。器色淡褐色で、全面丹塗り。胎土粗で焼成堅緻。口径23cm。050は緩やかな肩部に内傾する口縁を有する。内・外面淡灰褐色。外面横ヘラミガキ、内面細かい継刷毛目・指おさえが残る。胎土密、焼成堅緻。口径16cm。053は端部が肥厚する小型壺で、器色暗褐色を呈する。外面横ナデ、内面笠横ナデ、胎土粗。焼成堅緻。054も壺口縁で、内外面丹塗りである。また内外面とも笠横ミガキ。胎土粗。焼成堅緻。058も壺頸部で外面に3条以上の平行沈線をめぐらす。外面丹塗りで淡褐色を呈する。胎土非常に密で、焼成堅緻。070は口縁上端部が肥厚する鉢である。外面暗褐色、内面黒色である。外面は一部に荒い横刷毛目を残し、他は笠ナデ、内面は荒い横刷毛目後笠ミガキを加え、光沢を放つ。胎土粗。焼成堅緻。口径24.8cm。082は口縁端部近くに焼成前穿孔を施した小型壺である。器色淡褐色で外面と内面一部に丹塗り。胎土密、焼成堅緻。口径10.2cm。083も小型壺である。器色淡色で、外面および内面上部横笠ミガキ、内面下部横ナデである。胎土非常に密で、焼成堅緻。口径11.8cm。085は壺である。外面および内面上部丹塗り。外面横笠ミガキ、内面斜めの刷毛目を残す。胎土粗。焼成堅緻。口径17.2cm。032は夜白式腹である。器色黒色で、外面に条痕を残す。胎土粗。焼成堅緻。035は底部に二次穿孔のある腹で瓶として使用されたものか。器色淡赤褐色で、底部外端に指おさえがある。胎土密、焼成堅緻。047は脚・坏部の境に刻目突帯を付する高坏である。器色暗褐色で内外面とも笠ミガキ調整。胎土密、焼成堅緻。突帯部径8.8cm。048は安定した腹底部である。器

20

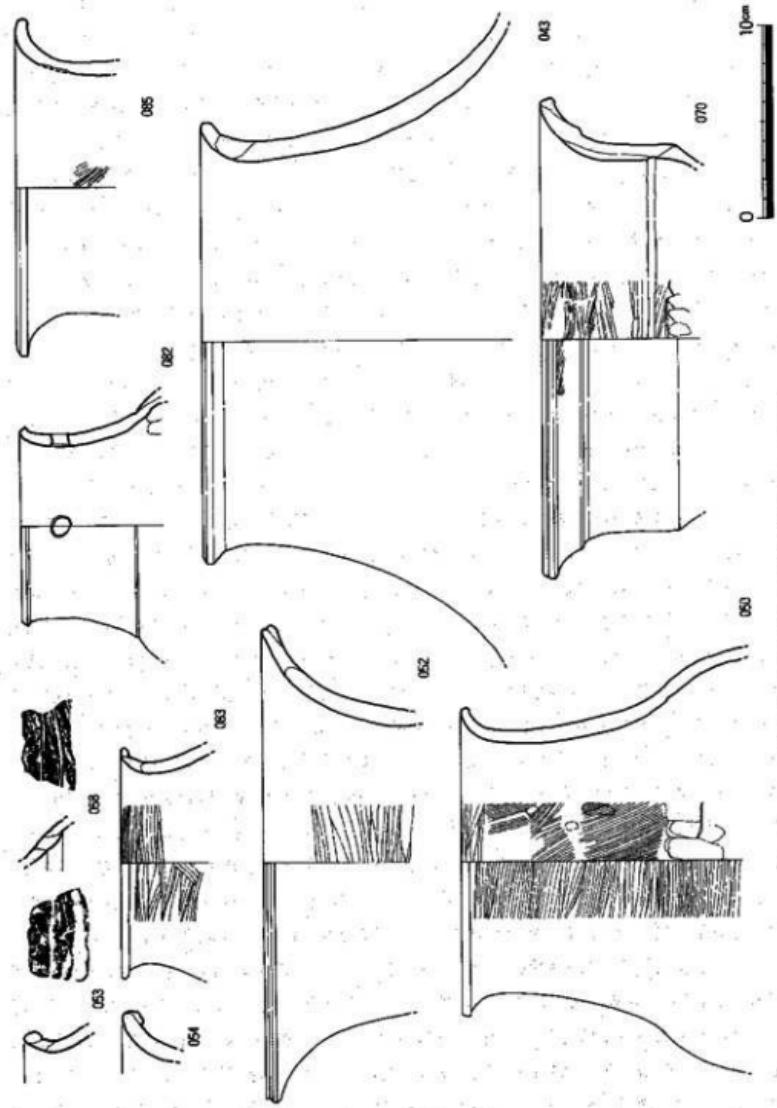


Fig. 14 G4e地区出土遗物实测图(3) (1:3)

色淡赤褐色で、内外面とも縱刷毛目調整。胎土粗。焼成堅緻。051は壺底部で円盤貼付の手法が顕著である。器色淡赤褐色で、外面範ナデ。胎土粗。焼成堅緻。056は脚部か。器色黒褐色で、外面範ナデ、内面斜めの条痕を残す。胎土に細砂の混入多く粗。焼成軟質。脚径13.2cm。057は浅鉢か。器色黒灰色で、器面の荒れが激しい。胎土密。焼成堅緻。059も浅鉢。器色淡褐色で、内外面ともにナデ調整。胎土粗。焼成堅緻。061は夜白式甕である。器色淡褐色で、外面丹塗り。外面横位の範ナデ、内面朱痕を残す。外底部範ケズリ。胎土密。焼成堅緻。062は器色淡褐色で、内外面横範ミガキ。胎土密。焼成軟質。063も壺である。器色黒灰色で、内外面ともに横範ミガキ。胎土密。焼成堅緻。064も壺である。器色淡灰色で、外面横範ミガキ。胎土粗。焼成軟質。065は中型壺である。器色淡黄褐色で、器面の調整は不明である。胎土粗。焼成軟質。069は高环脚である。境界部突帯に刻目はつかない。器色淡褐色で、外面横範ナデ・坏部内面範ナデ。胎土粗。焼成堅緻。脚径7.8cm。086は鉢形土器で口縁が屈曲し、外面下端に垂れる。器色淡褐色で、外面脚下半に細い刷毛目を施す。胎土粗。焼成堅緻。口径12.8cm。087は手捏ね鉢形土器である。器色淡灰色で、外面口縁端よりほぼ8mm間隔に緩い範描き沈線を連続的に施す。胎土密。焼成軟質。器高5.2cm。

② 第III層（灰～灰白色綈砂質粘土）上面出土の遺物（Fig.14-052、Fig.15-030・031・033）

052は口縁部が朝顔状に外開する壺である。器色外面淡赤色、内面赤褐色を呈する。内面下半に丁寧な横範磨きを施す。胎土綈質で密。焼成堅緻。口径24.8cm。030は須恵器甕頸部である。外面格子叩きで上部は横ナデ。胴部内面に大振りな青海波文を残し、上部は横ナデ。器色淡灰色。胎土密。焼成堅緻である。031は須恵器壺底部か。器色は外面淡灰色、内面明灰色である。胴部外面横範ケズリで、外底部は青海波文上をナデ調整。内底部は横ナデ・ナデを施す。胎土密。焼成堅緻。底径11.6cm。

小結

G4a地区の調査は中央台地北端部一帯の広範囲な状況を把握するのに有効な成果をもたらしたといえる。つまり北辺の丘陵部の生活構造が恐らく歴史時代の削平にあって殆ど消滅しているのに対して弥生時代前～中期生産址は比較的保存状態が良好であって、弥生時代前期における北辺部の可耕地のひろがりを確認し得た点や形成時期は不詳乍ら北台地との間に流れていたであろう幅約20m程の旧河川の存在を確かめたことなどである。

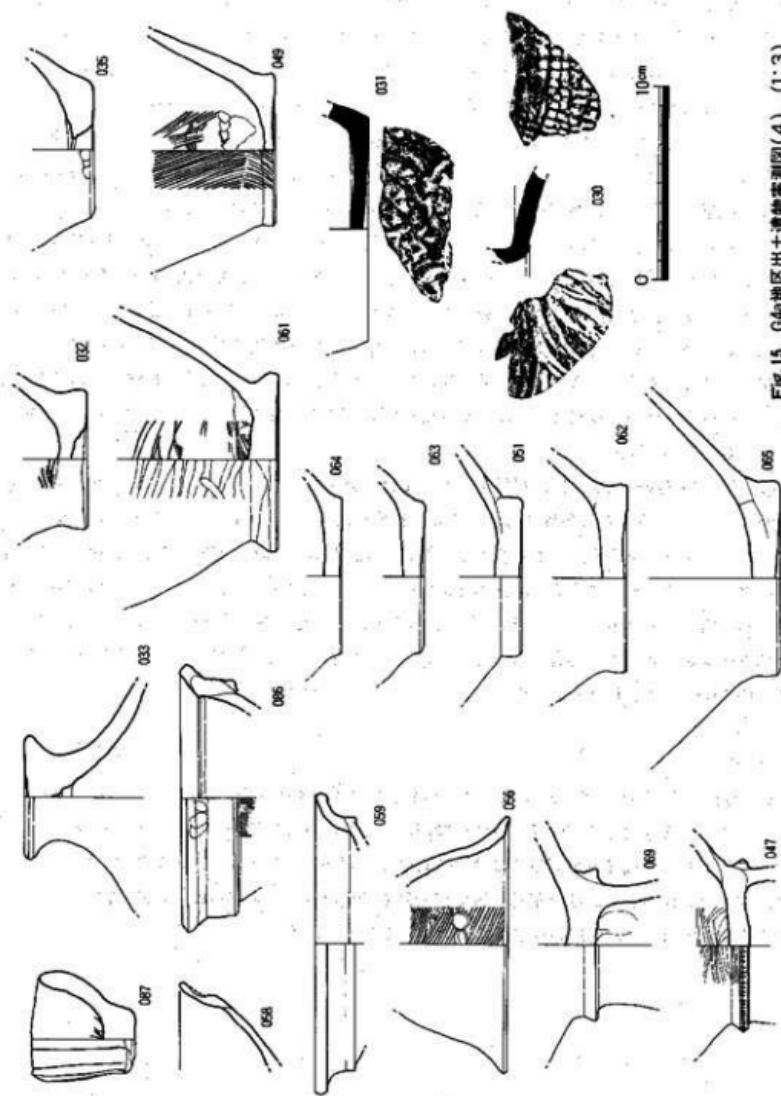


Fig. 15 G40地区出土遗物实测图(4) (1:3)

V F5g地区の調査

位置 (Fig. 1、付図1) F5g地区は中央台地東縁北東端近くに位置する。また環溝遺構より北々東へ70mの地点にあたり、昭和59年度の下水調査区F5d地区の北端部西側の東西調査区である。

層序 後世の地下げによる削平が顕著であり、地山面も西側が灰～灰白色粘土（八女粘土上部）、東側に従って茶褐色粘質土（鳥柄ローム）へと変化する。基本的には擾乱土下に旧耕作土（現地表より-50cm）、この下にF5h地区での第IV層（淡黒褐色粘質土－現地表より-50～-120cm）が堆積し、調査区東側で地山面の下降に従って第IV層の層厚は大きくなる。

遺構 (Fig.18) 本調査区は既述の様に後世の削平が大きく、検出した遺構の数は少ない。僅かに溝2条、小ピット1個である。

SD01溝 調査区西端部近くで検出した上端幅3.5～3.7m、深さ30cm程度の南北溝である。かなりの削平を受けている。埋土は單一な灰褐色粘質土である。埋土中より弥生時代中期土器細片が出土した。

SD02溝 調査区東端部でF5h地区の第IV層にあたる淡黒褐色粘質土除去後に検出した上端幅80cm、深さ15cm以上の南北小溝である。埋土は暗茶褐色粘質土で遺物の出土はなかった。

包含層出土の遺物 (Fig.16-096・098・099・102・108～115、Fig.17-094・095・097・100・101・103～107)

096は菱形土器蓋か。笠頭形をなし、頂上部がやや窪む。また口縁端部中央が四線状に窪む。器色外面淡灰褐色、内面淡褐色を呈する。調整は頭部内面に指おさえを残し、他は不明。胎土密。焼成堅緻。098は口縁上端面が内傾する甌である。口縁よりやや下った位置に1条の三角突帯をめぐらす。器色外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。器面の磨滅が著しく、調整不明。胎土粗。焼成堅緻。口径28cm。099は錐形口縁を有する甌である。全体に薄手のつくりである。器色外面赤褐色、内面淡赤褐色で、外面および内面上部は丹塗りである。胎土密。焼成堅緻。口径26cm。102は口縁が「く」字形に屈曲する甌で、口縁端部は丸みをもち、内端は跳上げ状となる。また口縁下に1条の沈線をめぐらす。器色外面淡黄褐色、内面淡赤橙色である。調整は外面に一部縱刷毛目を残す以外は横ナデである。胎土密。焼成堅緻。口径28.8cm。108は甌蓋頭部である。器色淡赤褐色。外面に細い縱刷毛目を施し、頭部内面に指おさえ。胎土密。焼成堅緻。108も蓋である。同様に頭部が窪む。器色赤褐色。頭部内外面に指おさえが残り、外面に縱刷毛目調整。胎土密。焼成堅緻。110は夜白式甌である。器色淡褐色。調整は内外面とともに横ナデで、外底部範ケズリを施す。胎土やや粗。焼成堅緻。底径7.8cm。111は甌底部か。器色外面淡灰褐色、内面黒色である。外面ヨコナデ。磨滅・剥落が著しい。胎土密。焼成堅緻。底径8.6cm。112～114は夜白式土器甌である。112は口縁端部に細い刻目突帯をめぐらす。刻目は深く、端正である。

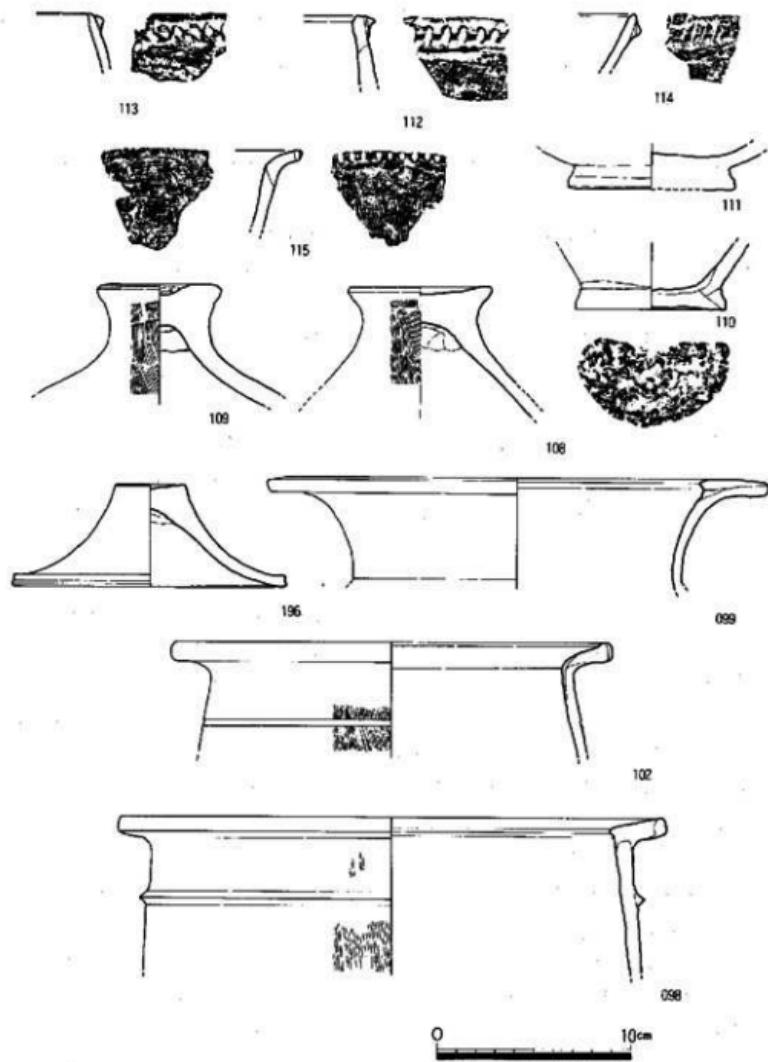


Fig. 16 F5g地区出土遗物实测图(1) (1:3)

器色外面暗赤褐色、内面淡褐色である。外面横窓ナデ。胎土密。焼成堅緻。113は薄手の内傾する口縁を有する。器色外面淡灰色、内面淡灰白色である。外面横窓ナデ。胎土密。焼成堅緻。114も薄手で、口縁端部よりやや下った位置に細い刻目突帯をめぐらす。器色外面淡褐色、内面赤褐色である。胎土砂質で粗。焼成堅緻。115は板付I式土器裏である。口唇全面に刻目を施す。器色内外面ともに暗褐色である。外面および内面上部に縱・横の刷毛目調整を施す。胎土粗。焼成堅緻。084は環口縁および脚端部を欠失する高環である。環部は浅く、口縁端部はやや垂れると考えられる。脚部は上部が肥厚し、裾部に従って器壁が薄くなっている。脚部内面を除き全面丹塗り。器表の磨滅が著しい。胎土密。焼成堅緻。095は支脚状の土製品である。裾ひろがりの中実円筒中央にやや斜めの孔（直径1cm）を有する。器色淡黄一淡赤褐色である。胎土非常に密で、焼成堅緻。底面径6.7cm。097は口縁が顯著に「く」字形に屈曲する甕である。器色外面淡褐色、内面淡灰褐色である。外面胴部に荒い縱刷毛目を残すが、他は内外面ともに横ナデ・ナデ調整である。胎土密。焼成堅緻。口径31.8cm。100は口縁端部の短い袋状口縁を有する甕である。器色外面赤褐色、内面淡褐色である。頭部に1条の三角突帯をめぐらし、直立気味の口縁は端部で内傾屈曲し、外面に緩い稜を有する。外面に荒い縱刷毛目を施し、他は横ナデ調整。内面の一部に指おさえが残る。胎土は粗砂を多く混入して粗、焼成軟質である。口径16.6cm。101は無頸壺蓋である。外面丹塗りで、縁辺付近に2個一对の焼成前穿孔が2ヶ所認められる。また内面に指おさえが顯著に残る。胎土密。焼成堅緻。口径10.4cm。器高1.1cm。103は口縁が内傾する中型甕で、頭部に低い三角突帯1条をめぐらす。器色淡赤褐色。調整は外面突帯部付近に横ナデ。他は内外面ともに縱方向のナデを施す。胎土は細砂を多く含み密で、焼成堅緻。口径16.4cm。104は「く」字形口縁を有する甕である。全体に磨滅が著しい。器色赤褐色で、外面胴部に細かい縱刷毛目調整を施す。胎土粗。焼成軟質。105は中型甕である。口縁は内湾気味に立ちあがり、内面に鋭く突出する。器色外面淡灰褐色、内面淡褐色を呈する。胎土粗。焼成軟質。106は胴部の張りが著しく、口縁は内傾して、直線的に口縁へと伸びる。全体に二次的焼成を受けている。器色淡赤橙色で、口縁内面に横ナデが残る。胎土粗。焼成堅緻。107は無口縁壺と呼ぶべきか。胴部の膨みは顯著で、口縁端部は鋭角に仕あげる。外面および内面端に丹塗りを施す。内面胴部は横ナデ。胎土密。焼成堅緻。口径10.4cm。

小結

F5g地区は後世の削平のため遺構の検出には恵まれなかつたが、中央台地東縁北端部の遺構分布状況と弥生時代中～後期前半代の土器類を多量に出土した淡黒灰色粘質土層（包含層）の形成時期の上限と性格を考える上で材料を提供したといえよう。

26

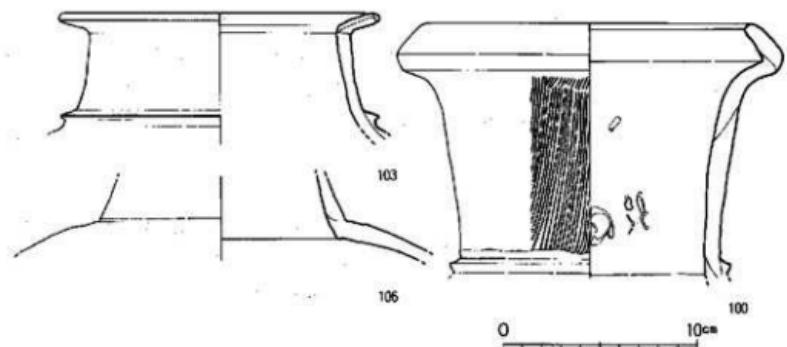
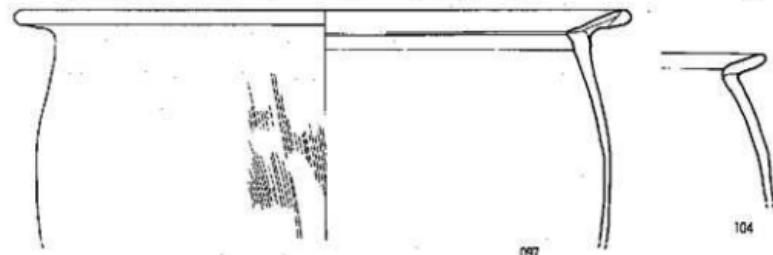
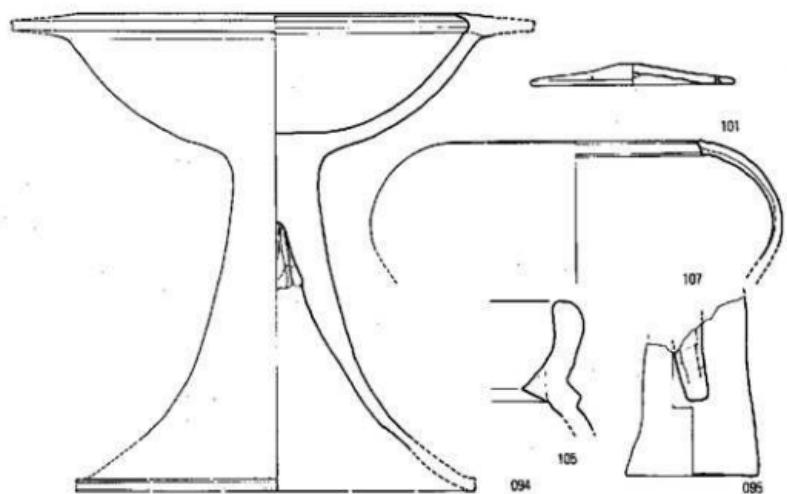


Fig. 17 F5g地区出土遺物実測図(2) (1:3)

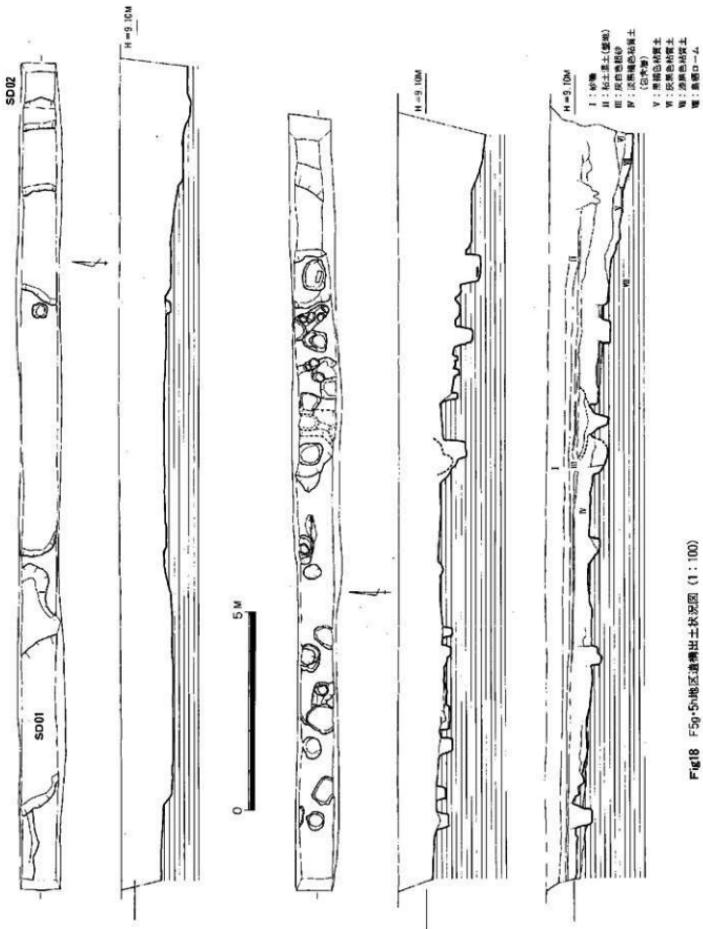


Fig18 F5g·5h地区遺構出土状況図(1:100)

VI F5h地区の調査

位置 F5h地区は中央台地東縁に直交する調査区で、F5dに隣接し、前のF5g地区の南55mに位置する。また環溝遺構東辺から東へ約40mの地点である。

層序 (Fig.18) 中央台地東縁の層序としては特徴的であろう。

第I層（砂礫層） 上面標高9.80m程で層厚40cmをはかる整地層である。

第II層（八女粘土・鳥栖ロームに若干の砂礫を混じる） 第I層前の整地層で層厚15~20cm程度である。

第III層（灰白色粗砂） 層厚5~10cmの薄層である。

第IV層（淡黒褐色粘質土） 西端部で上面標高9.25m、東端で同8.6m程となり、層厚も西端部20cmから東端で50cmとなる。内部には弥生時代中期遺物を主として、古墳時代中期の遺物破片が多量に出土する。古墳時代中期以降の整地層である。

第V層（黒褐色粘質土） 調査区東端部最下面に乗る。層厚20cm前後で、上端部標高8.35mを前後する。夜白式土器を包含する。

第VI層（灰黑色粘質土） 第V層上に乗り、20~25cm程度の層厚を有する。

第VII層（漆黒色粘質土） 第V層と色調を除けば同質である。層厚20cm程度で東側に従って低くなる。

第VIII層（地山層） 調査区のはば中央部を境として西側が鳥栖ローム下部層、東側が八女粘土へと変化する。

遺構 (Fig.18) 検出した遺構は全て柱穴と考えられる小ビット21個である。この中では図中中央に破線で示した溝状遺構が整地層である第IV層上面から掘込まれ、更に埋土中に輸入白磁片を含む点で中世期と考えられ、底面に柱穴が複数見出されることから布振り掘方をもつ遺構の可能性がある。またこれ以外のビット群は径40~70cm、深さ30~50cm程度の規模で、何れも第IV層除去後に検出され、埋土は淡褐色土に鳥栖ローム塊を混じるものが多い。調査区西端部より東へ16m程の地点は段おちとなり、第V層（黒褐色粘質土）の堆積が始まっており、E5b地区で検出された水田址に関連をもつ可能性がある。

包含層出土の遺物 (Fig.19~21)

図に供した遺物のうち130 (Fig.20) 以外は全て第IV層（整地層）出土のものである。

118~117は器台である。118は細身で、器色淡褐色を呈する。外面縦刷毛目で、端部横ナデ。内面下端部に細かい横ナデ。上半部は箆によるケズリを加える。胎土密。焼成堅緻。117は器色淡褐色で、外面縦刷毛目・横ナデ調整。胎土粗。焼成軟質。121は土師器小型丸底壺である。器色赤褐色で、外底部に細かい斜め刷毛目調整を施す。内底部箆ケズリを加える。胎土密。焼成

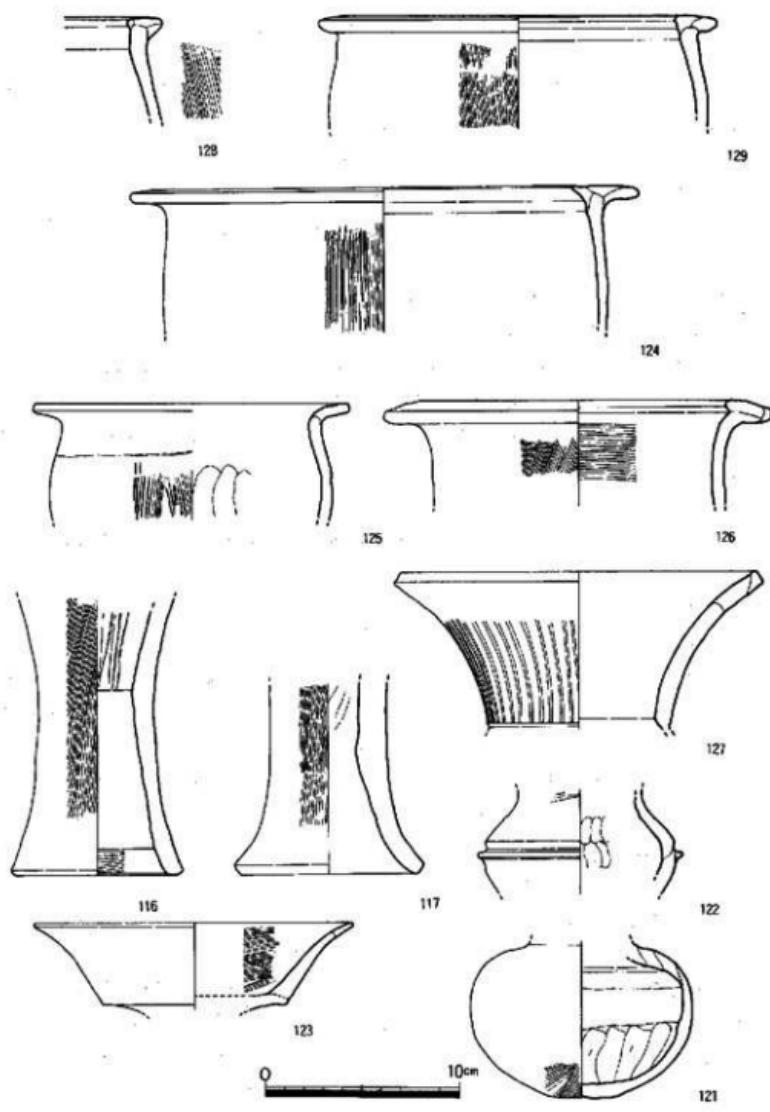


Fig. 19 F5h地区出土遗物实测图(1) (1:3)

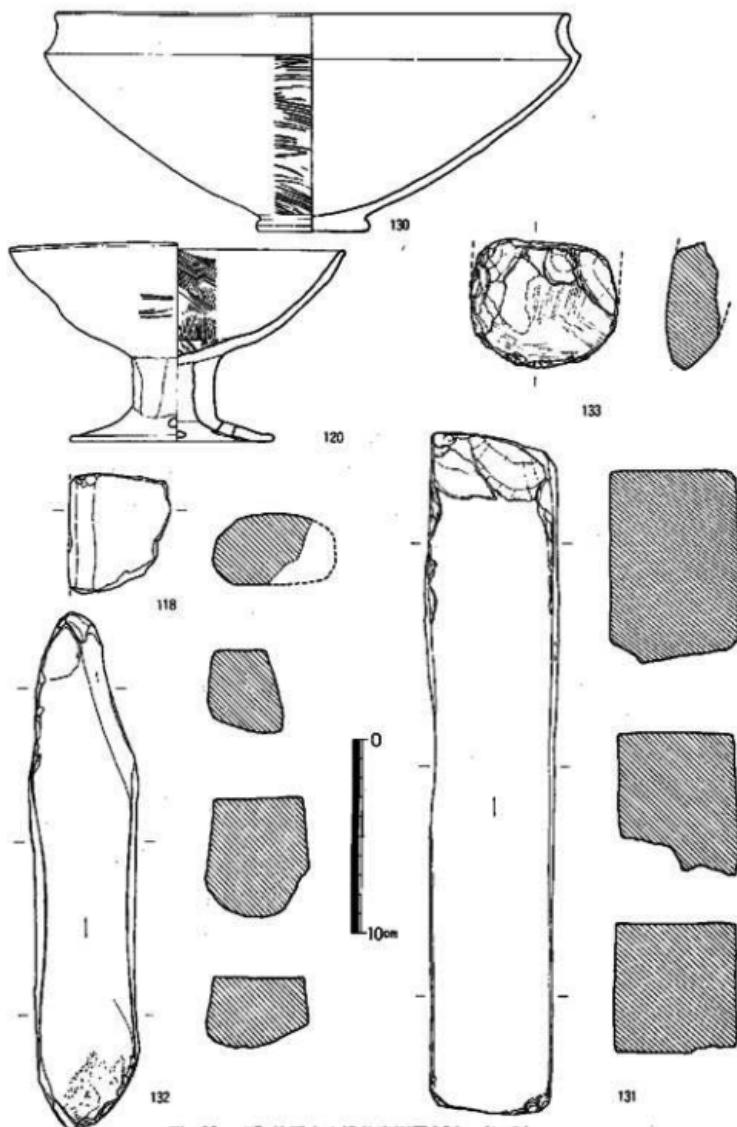


Fig.20 F5h地区出土遗物实测图(2) (1:3)

堅緻。122は胸部中位に細い突帯1条をめぐらす小甕である。器色赤褐色で、外面横ナデ調整を施す。内面は指おさえ後に横ナデを加える。胎土密。焼成堅緻。123は土師器高坏である。坏部は段を有する。器色淡黄褐～赤褐色を呈し、外面範横ナデを施す。内面は細かい縦刷毛目調整を加える。胎土密。焼成堅緻。口径16.4cm。124は口縁上端の平坦に「T」字形口縁慶である。器色外面淡灰褐色、内面淡赤褐色を呈する。調整外面に荒い縦刷毛目を施し、他は横ナデである。胎土密。焼成堅緻。口径26cm。125は小型甕である。口縁は「く」字形に緩く屈曲する。器色外面赤褐色で、内面墨褐色を呈する。調整外面一部に荒い縦刷毛目、内面に指おさえを施す以外は横ナデである。胎土粗。焼成堅緻。口径16cm。126は直立気味の頭部に短い鋸形口縁を有する甕である。器色黒褐色で、外面縦刷毛目を施す。内面横窓ミガキである。胎土粗。焼成軟質。口径20cm。127は口縁が朝顔状に外開する甕である。器色赤褐色で、外面に円棒状工具による暗文を施す。内面上部は横窓ナデである。胎土粗。焼成軟質。口径18cm。128は中期初頭代の甕である。器色淡褐色で、外面に荒い縦刷毛目を施す。胎土粗。焼成軟質。129も同代の逆「し」字形口縁をもつ甕である。器色淡褐色で、外面に細かい縦刷毛目を施す。胎土粗。焼成軟質。128は高坏である。浅鉢に短脚をつける。器色淡赤褐色で、外面横・縦ナデを施す。内面は細かい斜め刷毛目を施す。脚裾部に3個の透孔をもつ。胎土粗。焼成堅緻。口径17cm。器高10.4cm。130は夜臼式精成浅鉢である。器色内外面とも黒褐色を呈し、外面条痕調整後に丁寧な横窓ミガキを施す。外底部に木葉痕あり。胎土密。焼成

堅緻。口径26.5cm。器高11.1cm。底径5.6cm。

土・石製品 (Fig.20) 118は不明土製品で、器色淡褐白色を呈する。胎土は石・褐色砂を混入し密で、焼成軟質。131は長大な砥石である。長・短が34.8×6cm、厚さ9.8cmをはかる。両側刃研磨。褐色砂岩。3.66kg。132も砥石である。長・短が26.8×4.5cm、厚さ6cmをはかる。青色砂岩。1.1kg。133は蛤刃石斧を再利用した敲石である。旧刃部周辺を主として使用している。頁岩質砂岩。210g。

玉・青銅器 (Fig.21) 1・2はガラス小玉である。1はライトブルー色で、径3mm、厚さ3.5mmを測る。2はコバルトブルー色で、径5mm、厚さ1.5mmをはかる。3は頭のみで尾を欠損する勾玉で、白色地に緑色斑文のちらばるガラスを使用する。4は有茎銅鏡である。現存長5.4cm(推

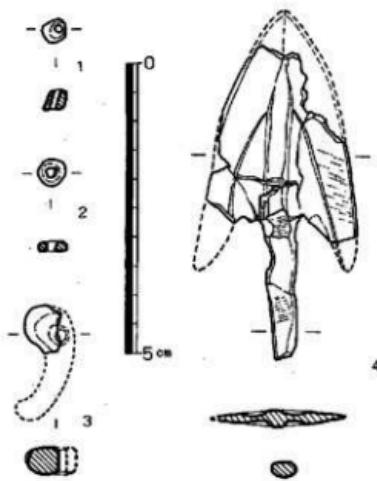


Fig.21 F5h地区出土遺物実測図(3) (実大)

定長6cm)、最大幅2.5cm、厚さ3mm(背部)をはかる。背部の先端部は不明瞭で、関節部は腸抉りが深く、橈状に先端に従ってのびる。茎は2.45cmを測り、横断面は扁円形をなす。

小結

F5h地区調査はこれまで記した様に中央台地東縁部の遺構遺存の状況と台地縁辺にひろがる整地層(淡黒褐色粘質土)の形成時期の把握に一端の成果をもたらしたといえる。また遺構より遊離してはいるが本調査区に隣接するE5b地区でも銅鏡・鉄斧・鉄鎌先が出土しており、両地区に見出された玉・金属器類を出土する生活遺構が環溝遺構東側に分布していることが想定される。

VII おわりに

今回調査した板付地区下水道建設に伴う5地区は中央台地西縁部(H5b・H5c地区)、北縁部(G4a地区)、東縁部(F5g・F5h地区)にまたがる地点にあたるが、全調査面積は320m²に満たない。H5b地区は中央台地の西縁に細長く張付く弥生時代前期以降の水田に伴う遺構の一端を把握した。H5c地区は南端部が弥生時代墓地他のG5a地点(1975年調査、甕棺墓43基(前期末~1基、中期前葉~成人棺2基・小児棺37基、中期中葉~成人棺1基・小児棺1基、不明1基)および前期~中期中葉以前の木棺・土壙墓24基検出)の西側に隣接し、中期前葉成人棺2基を追加した点で墓域は更に西側に拡がるものである。また北端部で上面標高がほぼ7.10m程度と確定できる第IV層(黒色粘土)に掘り込まれた溝遺構が東側に隣接するG・H5地区の第2号溝と連絡するものであろうことやこの溝遺構南側に前期竪穴・柱穴群が多く検出されている点でこのH5c地区北端部付近が生活址と沖積地の生産遺跡の境界にあたる事は論をまたないであろう。G4a地区は中央台地と北台地とを分ける旧河川の存在と弥生前期の生産址のひろがりを示唆しよう。F5g・5h地区的調査では、1985年調査のF5d地区調査の成果に示されているようにF5h地区第IV層(整地層)⁽¹²⁾の形成が平安時代~奈良時代に下るとされる点で上限についての十分な比較となり得ないが、少くとも古墳時代中期以前の遺構群が中央台地東縁部に濃く分布していることが想定できよう。

これまで板付台地上で行なわれた諸調査は北・中央・南の各台地に及んでいる。板付北小学校建設に伴う広範囲の北台地の調査では弥生前期水田址の手がかりとともに生活遺構で竪穴住居址を含まない計108個の貯蔵穴(前期前葉22、前期中葉32、前期後葉23、中期初頭4)があり、更にこの後に墓地が重複している。甕棺墓63基(前期末~中期中葉まで)・木棺墓24基・土壙墓

27基の計114基構成である。また南台地でもF9a地区でも弥生時代前期後半袋状貯蔵穴や金海式甕棺破片が調査されており、北台地と同様に生活址・墓地の空間的単位をなすことは確実である。

今回報告では環溝造構以北の既調査成果についての大略図（付図参照）を作成したが、板付環溝集落の造構々成と付帯する生産遺跡との機能を更に明らかにするためには周到な調査地点の図上確定と調査成果の整理が早急に必要な作業となるであろう。

註 「板付周辺遺跡調査報告書（11）－下水道調査に伴う調査（1984・85年度）－」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集」 1986 福岡市教育委員会

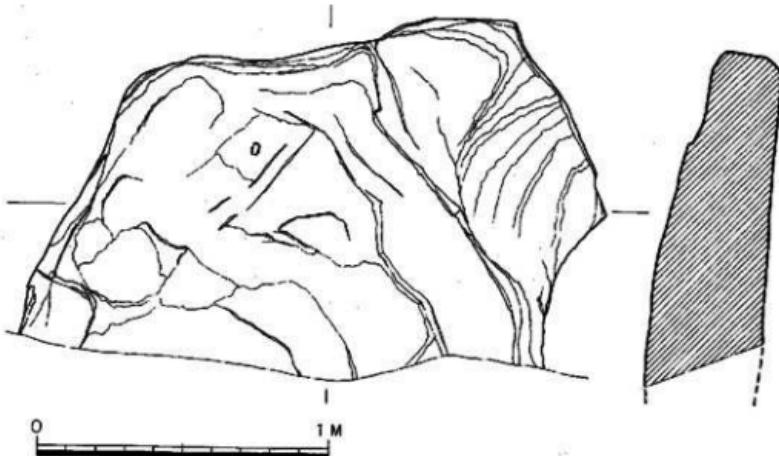


Fig.22 板付田端遺跡発見の大石(推定) (1 : 20)

図 版



1



2

1. H5b地区SD01溝出土状況
2. H5c地区SD03溝出土状況



H 5 c地区第3区調査状況（南から）

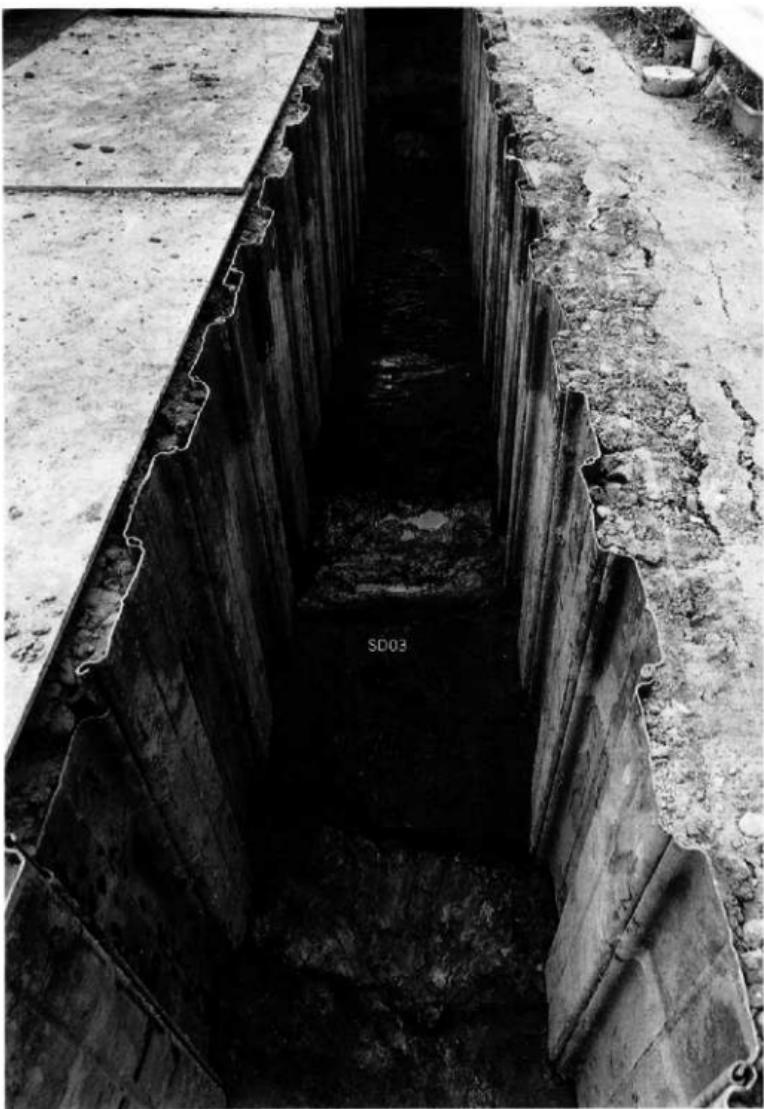


1



2

1. H 5 c地区SK01裏棺墓出土状況（東から）
2. H 5 c地区SK02裏棺墓出土状況（東から）



H 5 c 地区第 4 区調査状況（南から）

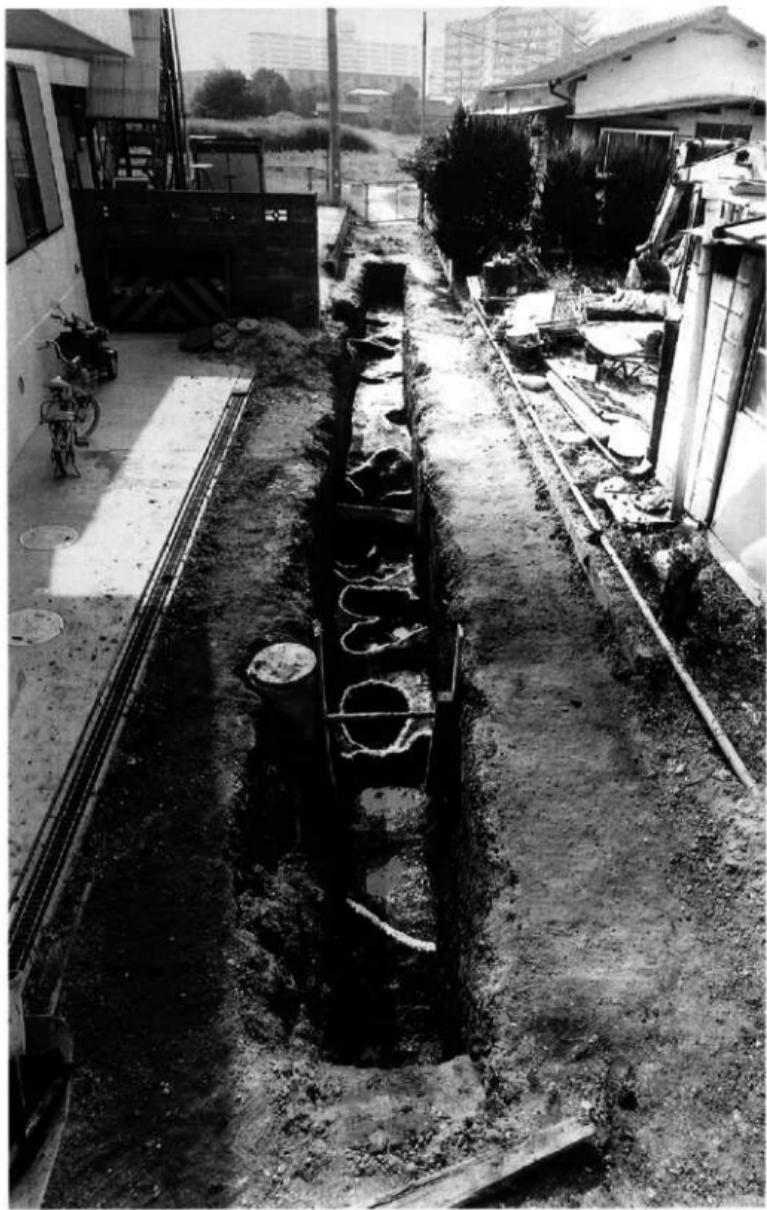


1



2

1. H 5c地区SD03溝出土状況（北から）
2. H 5c地区第4区北壁土層（北から）



F 5 b地区調査状況（東から）



1



2

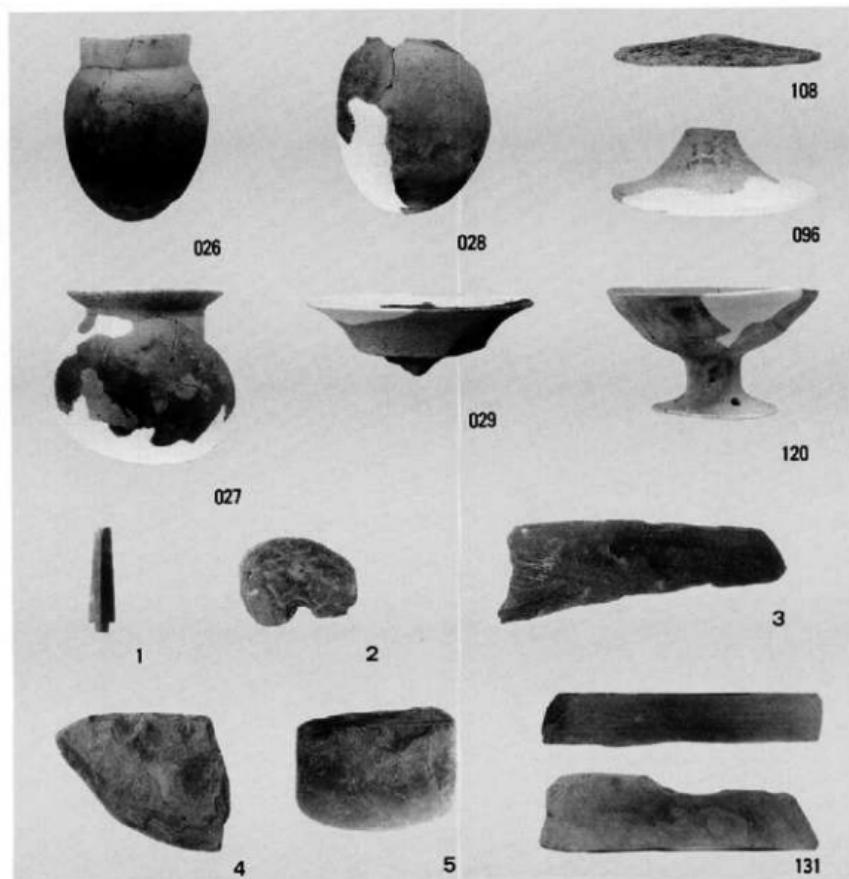


3

1. H5c地区SK01喪棺下棺

2. H5c地区SK02喪棺上棺

3. H5c地区SK02喪棺下棺



各地区出土遺物 (1 ~ 5 - G 4 a地区第IV層出土, 他は挿図と同一番号)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第171集

板付周辺遺跡調査報告書(13)

1987年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大名2丁目10番29号 ようきビル

印刷 赤坂印刷株式会社
